
光を纏った愚者のおはなし

壬生雪桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光を纏った愚者のおはなし

【Nコード】

N3762H

【作者名】

壬生雪桜

【あらすじ】

ローゼンメイデンの第六ドール雛苺は、みんなを守るための戦いを目的をしていた。が、原作では志半ばで果ててしまう。このお話は、雛苺が意志力と力を持って目標を達成した場合を想定したイフストーリーです。

第一幕：導く光

前回までのあらすじ

みんなを護るために、真紅の家来になった雛苺。とはいえ、どうしたらいいのか雛苺

には皆目見当もつかなかった。

まあそうは言ってもさほど本人は気にしてなかったが・・・、適当にやればなんとか

なるだろうという算段だった。

が・・・しかし！そんな雛苺の目論見は外れ蒼星石を護ることに失敗。今度こそ何とかしようとなつた新たな決意を秘める雛苺だが、さてその方法となるとやはり

皆目見当がつかなかった。

ベリーベル「雛苺様！雛苺様つてば！」

雛苺「うにゅ・・・。なんなの？こんな時間に。ヒナはお昼寝中なのよ。」

ベリーベル「いやね。いい話があるんですよ。聞いてくれませんかね？」

雛苺「なあに？」

ベリーベルが話しかけてくるとは珍しいことのようにもあるが割合そうでもない。

ベリーベル「雛苺様は真紅の家来にされてしまわれました。そのお

かげでどーんと
パワーダウン、これはまずい状況じゃないんですかね？」

雛苺「そうなの？」

ベリーベル「そうですよ！力がなければみんなと護ることなんてとてもとてもできなかった
ものではありません。」

雛苺「そんなこと言われても困るのよ。」

ベリーベル「いえいえ。ですからこの私めが貴方様を魔法少女にしてさしあげようというですよ。」

雛苺「魔法少女ってなーに？」

ベリーベル「めんどくさいですなあ……。とにかく強くなれるんですよ。」

でなりますか？
ちなみに魔法の力を得たことは他の人にばれてはいけません。
ばれたらみんなの記憶から貴方様が消えてしまいますからね！」

雛苺「みんなの記憶が消えるとどうなるの？」

ベリーベル「どうともありませんよ。みんなが貴方のことを忘れるだけです。」

雛苺「ヒナ、そんなの嫌なの。」

ベリーベル「本当にめんどくさい人ですね。ばれなきゃいいんですよ。」

そのくらい貴方様にだって分かるでしょう？はい。契約完了。よかったですね。これで貴方様は魔法少女ですよ。」

雛苺「うい。じゃあもう寝てもいい？」

ベリーベル「張り合いのない方だ・・・。」

ベリーベルはイライラしてきた。

雛苺「おやすみの・・・。」

ベリーベル「ちょっと待ってくださいよ。」

雛苺「まだ何かあるの？」

雛苺は横になりかけたがむくりと起き上がる。

ベリーベル「いいですか。雛苺様は変身できるようになったのですよ。」

ですから変身してください。」

雛苺「変身ってなーに？ヒナ眠いのよ。」

ベリーベル「ストロベリーチェンジ！っていえば変身できますよ。やってみてください。」

雛苺は嫌そうだったがしぶしぶ言うことに従った。

雛苺「ストロベリーチェンジ。」ピカピカピカーン！

ピカッと光ったかと思うと、雛苺は魔法少女に変身していた。

雛苺「前が見えないの……。」

ベリーベル「全く……。世話の焼けるお人だ。その仮面、目のところがり切り取れるようになってますから。それをとれば見えますよ。」

雛苺には、苺の仮面とピンクのマントが装着されている。

どう見ても魔法少女には見えない。

雛苺「こんなのいらないのー！」ポイツ！

雛苺は嫌になって、苺の仮面を投げすてた。

ベリーベル「なにやってるんですか！まだわからないのですか？今の貴方様が人に見られたら、みんなの記憶から貴方様が消えてしまうのですよ？」

雛苺はいつになく必死なベリーベルを見て少し不安になってきた。

雛苺「元に戻るにはどうしたらいいの？」

ベリーベル「それは悪の怪人を倒せば戻るのです。そんなことより早く仮面をつけてくださいよ。」

雛苺はやけにベリーベルが慌てているので、へんてこな苺の仮面を仕方なく顔につけることにした。

カチャ。

雛苺「これでいいの？」

しかし、さすがの雛苺も少しキレ気味になる。

ベリーベル「いいじゃないですか。よくお似合いですよ。貴方は魔法少女ストロベリーマスクとして生まれ変わったのです。さあ庭に行きましょう。そこに怪人がいるはずです。」

雛苺「悪の怪人……。ヒナ頑張るの！」

大喜びの雛苺は単純のおばかであった。ベリーベルは内心ほくそ笑んだ。

ベリーベル「怪人を倒せば倒すだけ世界の平和に近づくのですよ。」

雛苺達は庭に出てみる。

雛苺「うゆ？誰もいないのよ？」

真紅「いたわね！怪人！おとなしく私のくんくん人形を返すのだわ！」

雛苺「うにゅー？真紅。どこに怪人がいるの？」

雛苺は周りをきよろきよと見渡す。

真紅「とぼけても無駄だわ。貴方が怪人変態マスクだってことはお見通しよ！」

話が違う！雛苺は狼狽した。

雛苺「そ、そんなわけないの。ヒナはチュトロベリーマツクなの！」

真紅「問答無用だわ！私のくんくんを返しなさい！」

雛苺「ど、どうなってるの？ベリーベル。」

ベリーベル「うひょ．．うひょひよ。」

雛苺「ベリーベル？」

ベリーベル「申し訳ありません。雛苺様。貴方は私にまんまと騙されたそういうことなのですよ。」

貴方は悪の怪人変態仮面になってしまったのですよ！」

雛苺「ひどい！騙したのね！」

ベリーベル「うひょー？みょーなことをおっしゃいますねえ．．。だーまされたほうが悪いんじゃないですかあ？ひよっひよっひよ！」

雛苺「ひどいわ！ひどいわ！」

ベリーベル「いやーじゃないですか。結果的に貴方は力を手に入れたわけですし。」

雛苺「こんな力、ヒナいらないのよ!」

ベリーベル「こんな力だろうがどんな力だろうが、どのように使うのかは

あなた次第ですよ。ともかく真紅を倒しなさい。」

雛苺「べーだ!嫌よ。ベリーベルの言うことなんて聞かないわ。」

タッタッタ。

そう言つて雛苺は真紅のほうに走っていた。

雛苺「真紅ー!ヒナは雛苺なのー!だから乱暴しないでー!」

真紅「その手は食わないわ!」

真紅の両手から、薔薇の花弁が飛び散る。

真紅「レッドローズ・エンブレイズ!（赤薔薇の抱擁）」

雛苺「びゃー!」

薔薇の花弁に包まれた雛苺は、拘束され空中で爆発。

真紅「ふっ・・・正義は勝つのよ。」

プスプスプス。

ベリーベル「大丈夫ですか？雛苺様。」

雛苺「あまり大丈夫じゃないの・・・。」

ベリーベル「普段の貴方様なら今ので終わってました。私に感謝してほしいものです。」

雛苺「ヒ、ヒナを騙した癖に！貴方なんか絶好なの！」

ベリーベル「おや！それが気に入らないというのですか？私が貴方様を騙したことが気に入らない。ほーそうですか。そうですか。」

雛苺「う、うう・・・。そんなことないの。ベリーベルはヒナのお友達なのよ。」

絶好なんて言って悪かったの。ごめんね。（ニコっ）

ベリーベルは笑いかけられて顔をそむける。

ベリーベル「まあいいでしょう。次はありませんよ。とにかく真紅を倒すですよ。」

そうでなければ変身はとけません。」

雛苺「でもヒナは真紅とは・・・。」

ベリーベル「そうもいつてられませんよ。貴方は今は怪人なのですから、悪の闘争本能に支配されるはずですよ。」

雛苺「う・・・うう・・・」

ベリール「どうやら始まりでしたね。魔法の情報は貴方の頭の中に入ってるはずです。存分におやりなさい。」

雛苺は立ち上がる。

真紅「ん？気配が変わった。私の攻撃を受けてまだ立てるなんてやるわね。変態マスク。」

「

雛苺「ヒナはみんなを護るためにここで倒れるわけにはいかないの！」

真紅「世迷いごとを・・・そんな体でどうしようというの？」

雛苺「トウモエブレード！」ピカン！

真紅「あれは・・・確か竹刀？」

雛苺「電光斬り！ぴゃあー！」シュイン！シュイン！

雛苺の振るトウモエブレードの軌道から、光の束が放たれ真紅を追跡する。

真紅「な、なんなの？動けない？」

光の束は真紅を拘束する。

雛苺はもう一度剣を天に掲げる。

雛苺「トウモエブレード！」ピカン！

トウモエブレードに光が宿りエネルギーが充電されていく。

ベリーベル「今ですよ！雛苺様！」

タッタッタ。駆ける雛苺。そして飛ぶ。そして空中でグルグルと体をまるごと縦回転させ

・・・。

雛苺「十・萌・斬！ぴゃー！」

ブンブンブン！ペシッ！見事真紅の頭に命中。真紅の頭にたんこぶができる。

真紅「い、痛いわ。雛苺。」

雛苺「ごめんなの。真紅。」

ばたん。倒れる真紅。

ジュン「し、しんくうううー！」

いつからいたのかジュンが叫ぶ。

第二幕：新たな戦い

？「待ちたまえ！」

どこからか声が聞こえた。

ジュン「だ、誰だ？」

家の屋根に二人のドールのシルエット。

蒼星石「この世に裁けない悪がいるというのなら、この庭師の缺で僕が裁こう！とう！」

スタッ。見事着地。

ジュン「翠星石！待っていたぞ！マスターしたのか。」

翠星石「ふふふ。ばつちですう！」

つまりはこういうことだ。

話は少しさかのぼる。

翠星石「うう……。蒼星石。」

蒼星石を失って、塞ぎこむ翠星石を何とかしようとジュンは考えた。

ジュン「おい。これを見る。」カチャ

翠星石「そ、それは？蒼星石！」

蒼星石「元気だったかい？翠星石。」

翠星石「そんなどうして？蒼星石は・・・。」

ジュン「慌てるな。これは僕が操ってるだけだ。背中に糸がついてるだろう？」

翠星石「な、なんてことしやがるです！ん・・・でも確かに蒼星石の声が。」

ジュン「腹話術だよ。いいか。今世界は大変なことになってるんだ。お前はずっと

こもってたから知らないだろうがな。」

翠星石「それがお前のやってる馬鹿なことなにか関係あるです？」

ジュン「大ありだよ。」

ジュンの話によると、こうだ。最近世界では怪人というものが出現するらしい。

その怪人は嫌がらせが大好きで、人の嫌がることばかりしてるんだそう。

だから最近、真紅とジュンは一緒に怪人退治をしている・・・ということだった。

翠星石「なんだって翠星石達がそんなことに関わらなければならね

えです？」

ジュン「おいおい。冷たいな。人類の危機なんだぞ。それに真紅によれば怪人を

放つとくことはアリスゲームの崩壊を意味するんだそうだ。」

翠星石「どっちにしろ翠星石には関係ねえです。」

ジュン「戦えよ。薔薇乙女だろ。蒼星石だってそうしたはずだ。お前が一人じゃ戦えない

というのなら、蒼星石と一緒に戦え。

僕のマリオネットの技術をお前に教えてやる。」

翠星石「蒼星石……。」

蒼星石は意志を籠めたような眼で翠星石を見つめる。実際にはジュンがそう操ってるだけだろうが……。

翠星石「分かったです。蒼星石。またよろしく頼むですよ。」

蒼星石「……。」

翠星石「じゃあ早速教えやがれです！」

ジュン「お前ならやってくれると思っていたよ。僕にもそんな勇気があれば……。」

翠星石「何ぶつぶつ言ってるんです？早く教えやがれです！」

蒼星石「というわけだ。覚悟しろ。怪人変態仮面め！」

雛莓「ヒ、ヒナの知らないところでそんな動きがあつたなんて・・・」

ジュン「やつちまえ！翠星石！お前の力を見せてやれ！」

？「あらあ？ちよつと待つてほしいわねえ。」

蒼星石「・・・誰だい？」

ガチャン。ガチャン。姿を現せる新たな人物。それは果して？

？「変態マスク。この敵は私に任せてもらうわあ。」

雛莓「もしかして・・・水銀燈？」

？「違うわあ！誰が水銀燈よ！この姿のどこが私に見えるのお？」

翠星石「チビ人間。あれはなんですか？」

ジュン「ロボットみたいだな。どういうことだ？」

水銀燈と似たような形をしたロボットが現れる。

また回想になってしまいが、水銀燈のところにも事情というものが

あつた。

水銀燈「巻きますか？巻きませんか？なあにこれ。くだらないわあ。」

水銀燈は手紙を丸めて捨てる。もちろん無記入である。

水銀燈「どうせ翠星石辺りのいたずらね。」

チヨンチヨン。肩を叩くものがある。水銀燈は驚いて振り返る。

水銀燈「だ、誰？」

？「自分はギンギン燈、もしくはギンギン28号改であります！」

水銀燈はこの言葉に侮辱を感じた。

水銀燈「つまりジャンクにされたいとそういうわけねえ？」

ギンギン「違うであります。つまり自分が水銀燈の代わりに戦うのであります。」

そうすれば水銀燈はもうなくてアリスゲームの勝者に！」

水銀燈「いきなりやってきて何を言うのやら・・・。」

ギンギン「最近の怪人騒ぎは知っておりますか！」

水銀燈「ああ。今日も何体かやつつけたけどそれがなに？」

ギンギン「あれと戦うのは危険であります！あれの体内には人工ウ

イルスがおりそれが
人工精霊にうつってしまい人工精霊が病気になってしまつのであ
ります！」

水銀燈「随分と詳しいようだけど。貴方は一体？」

ギンギン「自分はアリスに最も近い水銀燈のためにローゼンから使
わされた使者であります。このコントローラーで自分を動かしてほしいのであります！」

水銀燈「なんと！お父様が私のために！それなら使うしか・・・い
や使わせていただき
ますわあ。」

ギンギン「ふつ。つまりはそういうことよお。私はお父様に選ばれ
たの。」

蒼星石「ちょこざいな！マツキン燈だかカツキン燈だとか知らない
けど、僕に適う
とでも思つたのかい？」

翠星石「蒼星石。今の話によれば本体が近くでコントロールしてる
はずですよ！本
体のほうを叩くです！」

ギンギン「無駄よお。それにギンギン燈よ。マツキンでもドツキンでもオツキンでもカツキンでもないわあ。」

ジュン「じゃあ聞くが、どうして怪人に加担するんだ？怪人は口ーゼンメイデンの敵だろ？」

ギンギン「おばかさんねえ。私には怪人なんてどうでもいいの。私の目的はアリスゲームに勝ち抜くことだけ。じゃあ分かったら消えなさい！」

蒼星石「させないよ！それとさつき名前を間違えたのはただの挑発だからね！本当だよ！」

翠星石「そ、そうです！賢い蒼星石が名前を呼び間違えるわけねえです！」

カーン！鉄とアームがぶつかりあい白熱した接近戦！

雛莓「うにゅー……。ヒナもう帰っていい？」

ベリーベル「貴方様はまだおわかりではないとは。」

雛莓「でももう真紅も倒したのよ？」

ベリーベル「そんなことはどうでもいいのです。この期に及んでうにゅーなどと緊張感

の欠片もない言動を慎むべきだと申し上げているのですよ。」

雛苺「でもこれはヒナの口癖だから仕方ないの。」

ベリーベル「ああつ……。そんなことだから貴方様はうだつがあらないのですよ。」

これではせつかくの私の苦勞も水の泡になります。」

雛苺「ともかくこれで元に戻るのよね?」

ベリーベル「ええ。戻れますとも。でもばれないように変身解除するですよ。」

変身解除と言えば戻れますから。」

雛苺「変身解除なの。」

ベリーベル「わー!だからばれないようにって!」

プシュー。マントと仮面が消え雛苺が元に戻る。

雛苺「ふー。もう二度と変身なんかしないの。」

ジュン「あれ?雛苺じゃないか。いつからいたんだ?」

雛苺「ずっといたの。それよりもよくもヒナを変態扱いしてくれたの。」

ジュン「はあ?何言ってるんだ?それより見る。決着がつくぞ。」

蒼星石が缺で、ギンギン燈を滅多切りにする。

蒼星石「裁きを！」

翠星石「思い知るです！」

バラバラバラ。細切れになるギンギン燈。

蒼星石「終わりだね。」

翠星石「さっすが蒼星石ですう！」

ジユン「見るよ。雛苺。あれ腹話術でやってるんだぞ。痛々しいだろ。」

雛苺「翠星石は未練たらたらなの……。気持ちは分かるけど。」

翠星石「お前がこうやれって言ったんじゃねえですか！」

その様子を影から見る水銀燈。

水銀燈「くうう……。なんて役立たずなお。これじゃ自分でやったほうがましだったわあ。」

チヨンチヨン。肩を叩くものに気づいて振り向く。

水銀燈「なによ！」

ギンギン燈「自分であります。」

水銀燈「貴方壊されたはずじゃ？」

ギンギン燈「新しいギンギン燈であります。」

水銀燈「へ、へー……。さしずめ29号つてところね？」

これにはさすがの水銀燈もびっくりであつたが、努めて平静を装う。

ギンギン「そうではありません。ギンギン28号改であります！」

水銀燈「まあなんでもいいわあ。だったらとつと戦いにいきなさあい。」

ギンギン「今日は疲れたのでこれで……。」

水銀燈「疲れたのは一機目でしょう？貴方は来て間もないじゃない。」

ギンギン「いえ……。それでも私は……。」

水銀燈「いいから行きなさい！」ドカツ！

ギンギン燈は水銀燈に蹴られて、倒れそうになりながら蒼星石のほうに突っ込む。

雛苺「！（まずい！誰も気づいてない！このままじゃ蒼星石が……。）」

ベリーベル（まさか雛苺様……。何を考えて？ま、まずい。）

雛苺「ストロベリーチェンジ！」ピカピカピカーン！

ギンギン「おととと。なかなか止まらない！」

苺仮面「トウモエブレード、電光斬り。ぴゃあー！」ドヒューン！

ベリーベル「愚かな・・・。」

水銀燈「な、なに？今雛苺が怪人に？」

ジュン「ん？なんだ？」

翠星石「どうしたんです？あつ、またでやがったのですか！変態マスク
！」

ギンギン燈はプシューという音を立てながらまたもや壊れる。

ベリーベル「やってくれましたね。雛苺様。」

苺仮面「何も言うことはないの。行くのよ。ベリーベル。」シュワ！

ベリーベル「仰せのままに。」ヒュッ！

消える雛苺。影で考え込む水銀燈。

水銀燈「あれは確かに雛苺のように見えた。確信はないけど・・・もしや例のウィルスとやらに？」

水銀燈は背後に気配を感じたので振りかえる。

水銀燈「そうそう、私の背後は取れないわよねえ……。ふうよかった。」

チヨンチヨン。背後から水銀燈の肩をつつくものが……。

水銀燈は顔をひくひくさせながら振り向く。

ギンギン燈「自分であります。」

水銀燈「貴方ねえ……。私をおちよくってるのぉ？どうしていつも後ろからでてくるのよ。」

ギンギン「それよりも1号と2号を回収しなければならないのであります。」

水銀燈「やっぱり28号目じゃないのね！ってことは貴方は3号？」

ギンギン「いや自分はギンギン28号改……。」

水銀燈「うるさいわあ！もうそれはいいのよ。じゃあ私が名前を付けてあげる。」

大体ギンギンってのも癪に障るし気に入らないわあ。

そうねえ。貴方達の名前は5よ！わかったわね？」

なぜ5なのかさっぱりであった。おそらく28「ご」をとって5にしたのであろう。

ギンギン「でも自分には……。」

水銀燈「うるさいといってるのよ！貴方はよ！」

5「であります・・・。」

水銀燈「今日はもういいわあ。帰るわよ。5。」

5「了解であります・・・。」

第三幕：怪人VS怪人

そして桜田家では、

真紅「まったくひどいめにあったわ。でもくんくん人形も無事だったし。」

翠星石「とんだ災難だったですね。」

そこへ、ジュンが首をひねりながらやってくる。

ジュン「おかしいなー？」

翠星石「どうしたです？」

ジュン「どこを探しても雛苺がないんだよ。柏葉の家にもいないみたいだしどこいったのかな。」

真紅「心配することないわ。時期帰ってくるでしょう。あの子もあれでローゼンメイデン心配しないでも大丈夫よ。」

翠星石「どうも翠星石には嫌な予感がするですよ。」

ジュン「そういえば真紅は、誰に呼ばれて庭に来たんだ？」

真紅「ベリーベルよ。」

ジュン「・・・そうか。実は僕もだ。」

翠星石「翠星石もです。」

ジュン「なあ・・・なーんか妙じゃないか？」

真紅「何が妙なの？」

翠星石「ベリーベルは人見知りが激しいです。真紅やら翠星石ならともかくジュンに話しかけるとは思えねえです。」

真紅「貴方も人のこと言えないわ。」

ジュン「茶化すなよ。真面目な話なんだからな。」

真紅「真面目な話？ベリーベルがどうかしたの？」

翠星石「いやそこまでは分からねえですが・・・。」

真紅「二人とも雛苺が心配なのはよく分かるわ。でもあの子ももう戦う強さも知っている

。明日になればきつと帰ってくるわよ。」

ジュン「そうかなあ？」

真紅「ええ。」

翠星石「真紅がそこまでいうのなら、チビ人間。明日になって帰ってこなかったら

また考えるですよ。」

ジュン「うーん……。僕はもうちょっと外行って探してみるよ。」

翠星石「あつ、なら翠星石もいくです。」

真紅「そ、それなら私もいくわ。」

その頃雛苺は、

苺仮面「ねー。ベリーベル。さっき変なロボット倒したんだから変身解除できないの?」

ベリーベル「あの程度では闘争本能は満たされませんね。」

苺仮面「びえーん! お家に帰れないのー!」

ベリーベル「やれやれ。一瞬で凛々しく感じたのは気のせいでしたか。

そもそも、なぜ変身したのですか? 蒼星石はもうただの人形なのですよ?」

苺仮面「うう……。ひつく。」

ベリーベル「泣いていては分かりませんよ。」

苺仮面「そ、蒼星石は蒼星石なの……。」

ベリーベル「……。まあともかく正義の味方を倒して闘争本能を満たしていただかない

と、貴方は本当に怪人になってしまいましたよ。」

莓仮面「正義の味方……。ヒナって本当に悪者になってしまったの？」

ベリーベル「さて？そうかもしれないし、そうではないかもしれませんが。」

初めに言っただでしょう。どんな力でも使うのは貴方様次第だと。一つ言えることは、貴方様の能力は前より上がっています。制約はありますが、その使い方は貴方様次第ですよ。」

莓仮面「ベリーベルは意地悪なの……。」

ベリーベル「ひよひよ！最高のほめ言葉でございます。」

莓仮面「ベリーベルのおばか！」

ベリーベルは素知らぬ風である。

ベリーベル「どうされますか？泣いていてもどうにもなりませんよ。」

莓仮面「ヒナのほかに怪人がいるって話よね？」

ベリーベル「ええ。たくさんいますとも。」

莓仮面「怪人ってなーに？」

ベリーベル「怪人は元は人形です。ローゼンメイデンに倒されれば塵となって消えます」

」。

雛苺はそれはあんまりだと思った。

苺仮面「ヒナが倒した場合はどうなるの？」

ベリーベル「貴方様が？変身前では同じ扱い。変身後では・・・さあそれは知りませんね。

ご自分で確かめてみては？」

苺仮面「消えてどこに行っちゃうの？」

ベリーベル「誰にも覚えてもらえなくなります。ちょうど貴方様の正体がばれた時と逆です。

新たに覚えられることがなくなるのです・・・。
ですからやがては、誰にも覚えてもらえず忘れさられるでしょう。
つまり本当の死です。」

苺仮面「どうしてこんなことが起こったの・・・？」

ベリーベル「それは分かりません。真相が知りたければ、くどいようですが

ご自分でお動きになることですね。」

苺仮面「う、うゆ・・・。」ストン。

雛苺はへたりとして座り込んでしまった。

ベリーベル「やれやれ。またそれですか。」

ザッザッ。何者かが近づいてくる。

？「やっぱり仲間だったか。」

莓仮面「うい？怪人さん？」

？「怪人ダルー魔ー様とは俺のことよ。まあそんなことはどうでもいい。実は

金糸雀とか言うローゼンメイデンもどきから、面白いことを聞いてな。」

莓仮面「カナから？」

ダルー魔ー「そうさ！お前を倒せば元の人形に戻るそうじゃねえか。俺はもうこ

んなふう人間に嫌がらせする生活は嫌だぜ。

元のみんなに愛されるダルマに戻る。悪いがそういうことだから消えてもらっぜ！」

莓仮面「な、なにいつてるの？カナがそんなこというわけないの。」

ベリーベル「無駄ですよ。彼は闘争本能に支配されてしまってます。そのエネルギーに共鳴させられ貴方の意識も・・・。」

莓仮面「く・・・わ、分かったの。でもヒナだったただでやられるわけにはいかないの。」

ダルー魔ー「そうかよ。じゃあいくぜ。」

ダルー魔ーは体を丸めて回転する。そのまま苺仮面に向かって突っ込む。

ベリーベル「まずいですね。あれに当たったらぺしゃんこですよ。」

苺仮面「ひゃ……。どうしたらいいの?」

ベリーベル「避ければいいんじゃないですかあ?」

ダルー魔ー「潰してやるぜ!」

苺仮面「ひょう!」

ピョーン! ジャンプするが、ダルー魔ーは途中で軌道を変え苺仮面に体当たりをかます。

苺仮面「びゃー!」

ぺしゃんこになる苺仮面。

ダルー魔ー「うわははは。どーだー?」

苺仮面「あいたたた……。潰れるかと思ったの。」

ダルー魔ー「なにい? まだ立ってられるとはさすがだな。変態マスケ。」

苺仮面「ヒナそんな名前じゃないのー!」

ダルー魔ー「ぐ……。ぐぐぐ……。」

莓仮面「あれ？」

ベリーベル「怪人は一定以上の攻撃行動をとると、闘争本能が解除されてしまうのです。その反動がきたのでしょう。」

莓仮面「わーい。ヒナ助かったのー。」

ダルー魔「くそっ！そうはいかねえぜ！やい！変態マスク。お前立って倒せるぜ！」

莓仮面「も、もうやめるのよ。。。」

ダルー魔「く。。。ダメだ。こんなかわいい女の子の人形を攻撃することなんてできない。。。」

ベリーベル（莓のお面付けてる人形がかわいい。。。のでしょうかね？）

莓仮面「だるまさん諦めてお家に帰るの。」

ダルー魔「何言ってやがるか。家に帰るためにお前を倒さないといけねえんじゃないか。。。か。。。か。。。」

でももういいか。これ以上嫌われ者になるくらいなら。。。おいっ！変態マスク！俺を攻撃しろ！怪人化を解いてくれ！」

莓仮面「うゆ？」

ダルー魔「分からねえのか？お前が俺を倒せば俺はもう暴れ回らなくて済むんだ。

分かったらサッサとしろ。」

莓仮面「で、でもそれじゃあ・・・。」

ベリーベル「やってあげなさい。それが情けというものですよ。」

莓仮面「で、でも・・・。」

ダルー魔「不思議なやつだぜ。お前も闘争本能に支配されてるはずなのにな。

お前ならもしかしたらこの事態をなんとかできるかもしれないな。さあやれ！お前も人形なら俺の気持ち分かるはずだ。」

莓仮面「・・・分ったわ。トゥモエブレード！」キラッ！

ベリーベル「やっとやる気になりましたか。」

莓仮面「ヒナね。なんとなく分かったの。だから・・・。」

雛苺にはこのときある確信があった。それを信じて雛苺は駆けた。

タッタッタ。ピヨーン！グルグルグル！

莓仮面「十・萌・斬！ひゃあー！」

ブンブンブン！ペシン！ダルー魔の頭にたんこぶができる。

ダル魔「な、なんだこの感覚は光に包まれていくような……。
ありがとう。

変態マスク。」

莓仮面「ヒナは変態じゃないのに……。」

コトン。後には残されたダルマの人形が残った。

ベリーベル「ほほう……。これはこれは。」

莓仮面「変身解除なの。」シューン……。

雛苺「どうしたの？ベリーベル。」

ベリーベル「このダルマのこと覚えてますか？」

雛苺「勿論なの。さっきまで戦ってたんだからいくらヒナでも忘れないの。」

ベリーベル「驚きですね。本来ならこのダルマを覚えることは私たちには不可能なはず。

どうやら貴方に倒された怪人は、元の何の制約も受けてない人形に戻ることができる
ようですよ。」

ベリーベルはなぜかにやりとしながら解説した。

雛苺「すごい！それはすごいのー！」

ベリーベル「これから忙しくなりそうですね。」

雛莓「ダルマさんはジュンの家に連れていくの！みんなも心配して
思うし急ぐの

よ！」

第四幕：戦いの目覚め

遠くから声が聞こえる。

ジユン「おい！雛苺ー！」

雛苺「あつ！ジユンなのー！」

ベリーベル「雛苺様！まずい！」

プーガシャン！

雛苺「あ・・・あれ？」

ベリーベル「あれじゃありません。早く病院に運ぶのです！」

雛苺「ジユン？」

ベリーベル「変身すれば空が飛べますし、病院の位置も分かります。とにかく変身してください。マスターを殺したいんですか？」

雛苺「嘘・・・嘘なのよ。」

ベリーベル「はあ・・・。見そこないましたよ。貴方様はやる時はやるお人だと思っていたのに。」

雛苺が手に持っていたダルマがふいに動き、雛苺の頭にぶつかる。

ベシッ！

雛苺「はっ・・・そうだ。早く病院につれていくの！ストロベリーチ
エンジン！」ピカピカ
ピカーン！

変身した雛苺は、ジュンを担いで病院を目指す。

ベリーベル「仕方ない奥の手です。亜空間突入申請！」

？「申請を許可します。」

苺仮面「何してるのベリーベル？」

ベリーベル「いいから早くここに入ってください！」

苺仮面「う、うい。」

亜空間に入ったと思った瞬間そこは病院だった。苺仮面はジュンを
病院に預かってもらい
。自分は控え室で待っていた。

苺仮面「うゆ・・・。」

ベリーベル「雛苺様は悪くありませんよ・・・。悪いのはライトもつ
けずに出てきた車
のほうです。しかもひき逃げしてきました。私たちがいなかった
らマスターはどうな
っていたことやら。」

莓仮面「ジュン・・・。」

ベリーベル「雛様。闘争本能をマスターをこのような目にあわせて奴に向けるのです。復讐ですよ。」

莓仮面「復讐？」

ベリーベル「そうです。」

莓仮面「ヒナはジュンが治ってくれればいい。」

ベリーベル「なんとという覇気のないお方だ！」

莓仮面は、今日はもうお帰りくださいといわれ、とぼとぼと帰路についた。

莓仮面「・・・。」

ベリーベル「元気出してくださいよ。あれは雛様が悪かったわけじゃないですって。」

莓仮面「ヒナがジュンにできることってないの？」

ベリーベル「それはマスターをこんな目にあわせた奴をとっちめてしまえばいいんです

よ。真紅や翠星石ならきつとそうします。

そうしないまでも、怒りを感じると思いますよ。それなのに貴方ときたら・・・。」

莓仮面「でも……。」

ベリール「貴方の闘争本能は許せないはずです。さあ！復讐にま
いりましょう！」

莓仮面「ぐぐぐ……。」

雛苺は夜の闇に消えていく。

翌朝。

真紅「あら？雛苺じゃないの。遅かったわね。」

翠星石「本当ですう！今までどこほつつき歩いてたですか？」

雛苺「……。」

翠星石「何黙ってるです？なんとかいったらどうです？」

ジュン「おい。その辺でやめておけよ。」

え？

雛苺「！」

雛苺は信じられなかった。目の前の光景が。一体どういうことなの
だろう。

雛苺「ジュン？本当に……ジュンなの？」

ジユン「なんだよそれ。僕は僕だろ。」

雛苺「ジューン！よかったのー！」ピョーン！

雛苺はジユンがあと後すぐ治ったのだと思った。雛苺は感激しジユンによじ登りジユン登りをした。

真紅「どうも変ね？なにかあったのかしらね？」

翠星石「うーん？チビチビ！」

雛苺「なあに？翠星石。」

翠星石「それはジユンじゃねえですよ。翠星石がマリオネットで操ってるだけです。」

翠星石はニヤニヤしながら言った。

雛苺「え？」

雛苺はこの世の終わりかというな絶望した表情になる。

その表情に翠星石は驚く。

翠星石「な、何真に受けてるです。冗談に決まってるですよ。」

雛苺は一瞬考えて、聞いた。

雛苺「ねえ。ジュン。」

ジュン「なんだよ。」

雛苺「ジュンっていつ帰ってきたの？」

ジュン「いつってなにがだ？」

真紅「・・・妙ね。私たちの誰も雛苺にあわなかったはずよ。どうして雛苺が私たちが外出してたことを知ってるのかしら？」

雛苺「え？それはうーと・・・。」

翠星石「何言ってるですか。真紅。雛苺だってローゼンメイデンですから、お互いの位置くらい意識したら分かるですよ。」

真紅「それはそうだけどね・・・。ならどうして私たちのほつになかったのかしら？」

それにね。私も実は雛苺の気配を探ったわ。

でも雛苺の気配は完全に消えてた。これはおかしいわ。」

雛苺「うと・・・その・・・。」

ジュン「もういいだろ。雛苺にだっていろいろとあるんだろう。僕はちよつと雛苺と

話があるからしばらく部屋に入ってくるなよ。」

翠星石「あつ待つです!。」

翠星石と真紅が止める。

真紅「やめておきなさい。」

翠星石「どうしてです?」

真紅「さっきは熱くなってしまったけど、ここは二人を信じてみましょう。」

翠星石「そんなこと言われたらどうにもならねえですよ。真紅は卑怯です。」

真紅「ふふつ。でも最近ちょっと妙なことが起こりすぎてるわね。」

翠星石「確かに・・・。」

ジュンと雛苺は二階にあがった。

ジュン「昨日はありがとうな。雛苺。」

雛苺「う、うい?なんのことなの?ヒナは別に何もしてないの。」

ジュン「ああそうだったな。まあ気にするなよ。僕が帰ってきた時間を知りたいか?」

ジュンは真っ直ぐ雛苺の目を見てくる。

雛苺「う、うい・・・。」

ジユン「実はな。昨日の夜。お前が遅いものだからみんなでお前を
探しに行ったんだよ。」

雛苺「そ、そうなのね。」

ジユン「ああ。まあみつからなかったしその後すぐ帰ったよ。時間
は覚えてないがな。」

雛苺「……。」

ジユン「どうした？今日は元気ないな。やっぱり昨日なにかあったの
か？」

雛苺「い、いやなんでもないの。ヒナちょっとお庭で遊んでくるの
よ。」

ガチャ。

ジユン「……さて久々に通販でもするか。」

庭に出た雛苺はベリーベルに詰問した。

雛苺「どうなってるの？」

ベリーベル「いや私にもわかりかねます。不思議なこともあるもの
ですなあ。うひ
よひよ。」

雛苺「ふざけないでほしいの！」

ベリーベル「雛苺様。真剣なお顔も愛らしいですよ。」

雛苺「ベリーベルは意地悪ばっかりなの・・・。」

ベリーベル「ひよひよ・・・。ただしかし本当に私にも分からないのですよ。」

マスターのこともそうですし、ここ最近の様々な出来事についても。」

雛苺「そうなの！どうしてベリーベルはヒナにこんなへんてこな力を与えることができたの？」

ベリーベル「それは教えることはできません。そのことについては、あるいは貴方の生命のロウが燃え尽きる前に、答えを出せるかもしれませんよ。何分時間がなさそうですから出すことができないかもしれませんけどね・・・。」

ひよひよ！」

雛苺「生命のロウ？」

ベリーベル「分かっているでしょう？貴方様は真紅よりエネルギーの供給を受けておりますが、それでいつまでもつのやら？」

雛苺「分かってるわ。」

ベリーベル「ならいいでしょう。私から言えることはそれだけです。」

雛苺「肝心なことは何も教えてくれないの！一体あの後ジュンはどうなったの？」

雛苺は珍しくぶんすかしている。

ベリーベル「さて？それはいいじゃありませんか。マスターも無事だったことですし、
ところで雛苺様は今後どうされる予定なのですか？」

雛苺「うにゅー？」

ベリーベル「貴方様が変身して怪人を退治すれば、あら不思議その怪人は元の人形
に元通り。」

魔法少女つぼくなってきたじゃないですか。」

雛苺「う、うい？」

ベリーベル「ですから、変身して怪人を退治なさればいいのですよ。」

雛苺「うーい。」

ベリーベル「本当に分かってるんですかね？」

雛苺「もちろんよ。怪人がいたらヒナが元に戻してあげるの。」

ベリーベル「でもね。雛苺様。変身を繰り返せばその分闘争本能が大きくなり、二度と元には戻れなくなりますから気を付けてくださいね。」

雛苺「そんなのヘーキなの。」

ベリーベル「左様でございますかね……。ひよひよ。まっせいぜい頑張ってくださいよ。」

雛苺「あつ、そういえばもう一つ聞きたいことがあったの。」

ベリーベル「なんでございますか？」

雛苺「あの病院に行くときに使った変な黒いのって何？」

ベリーベル「あれはまだ貴方様には早いですよ。もうちょっと成長すれば使えるようになるかもしれませんね。」

雛苺「うにゅ。」

第五幕：水銀燈の疑惑

水銀燈は雛苺のことについて考えていた。

水銀燈「ねえ。5。あの子ってやっぱりウィルスにやられたのかしらねえ？」

ギンギン「分からないであります！」

水銀燈「貴方本当に使えないわね。でも・・うふふつ、真紅は雛苺が怪人だと知ったらどう思うでしょうねえ？」

日ごろ偉そうに絆だのなんだのいつてるけど。」

ギンギン「自分の意見としては、真紅じゃないので分からないのであります！」

水銀燈「おばかさんね。誰もそんなこと聞いてないわあ。貴方は本当に無能ね。でもね。」

もしも・・もしもよ。雛苺が本当に怪人だったとしたら面白いことになると思わない？」

ギンギン「自分の意見としては、それはよい考えだと思うところであります。」

水銀燈「そう。じゃあ今日は雛苺を追い詰めてみて化けの皮をはがしてあげましょうか。行くわよ。5。」

ギンギン「なぜ自分が５でありますか？自分にはギンギン燈、もしくてギンギン２８号改という・・・。」

ドカツ！水銀燈に後頭部を蹴つとばされるギンギン燈。

水銀燈「うるさいわねえ。私が５といったら５なのよ。深い意味はないわあ。」

ギンギン「自分に準備を任せてほしいのでありますが、いかがでありますか？」

ふん。なにをいうのやら、水銀燈は、分かってるわよという表情でギンギン燈に言葉を放った。

水銀燈「ねえ、貴方。お父様から派遣されてきたとか言ってたけど嘘でしょう？」

ギンギン「な、なにをいつてるのでありますか・・・。自分は・・・。」

水銀燈「いいのよ。でもねえ・・・。私を利用してなにかしようって企むのなら・・・。」

水銀燈の目がキラリを光る。

ギンギン「な、なんでありますか？」

水銀燈「いいわ。分かつてるわよねえ？」

ギンギン「も、もちろんであります。自分は軍人であります。上司の命令は絶対であります。」

水銀燈「上司？私のことよね？」

ギンギン「も、もちろんであります。」

水銀燈「貴方みたいのってスパイっていうのよねえ？」

じわじわと水銀燈は、ギンギン燈に近寄っていく。

ギンギン「じゅ、準備がありますので自分はこれで失礼させていただきます！」

ぶおおー。ギンギン燈は火を吹き飛んでいった。

水銀燈「・・・何を考えてるか知らないけど、どうせ大したことじゃないわあ。
使えるうちに使っておくにこしたことはないわねえ。」

バサッ！ギンギン燈の後を追ひ、水銀燈も飛んでいく。

ギンギン燈は何やら妙な機械を桜田家の周りなどに設置している。

水銀燈「なにやってるの？」

ギンギン「細工は流々、仕上げを御覧じあれ。」

水銀燈「ふーん。まあいいでしょう。じゃあ私は隠れるから、後は任せなさい。」

水銀燈は茂みに隠れて、ギンギン燈をコントロールする。

ギンギン「・・・じゃ後は雛苺が来るのを待つだけねえ。」

そして1時間後雛苺が庭にやってきた。

雛苺「ヒナを呼び出そうっていうのはこれどういうことなの？水銀燈。」

ギンギン「遅いわよ。待ちくたびれちゃったわあ。貴方ちゃんと手紙読んだのお？」

雛苺「字が下手すぎて読めなかったの。だから捨てちゃったの。」

ギンギン「大きなお世話よ！じゃあなんで貴方はここにいるのよ。」

雛苺「ベリーベルに水銀燈が待ってるからって、貴方って確かギンギン燈よね？」

ギンギン「私は5よ。いや自分は・・・うるさい！ということよ。雛苺。」

私は5よ。」

雛苺「数時の5なの？真紅と同じね。」

ギンギン「なに？」

雛苺「真紅も第五ドールなの。だから同じね。」

ギンギン「ふっ・・・ふふっ。」

雛苺「どうしたの?」

ギンギン「雛苺。今聞いたことは忘れなさい。そのほうが貴方の身のためよ。」

雛苺「今聞いたことってなんだったつけ?」

ギンギン「・・・とぼけるきね。まあいいわ。どっちにしろ貴方はここで終わりよお。」

ドタドタドタ。

ジュン「どうしたー!」

翠星石「あっ!こないだのやつがまた来てるですう!」

真紅「庭に出れないわ!何かが邪魔をする。」

どうやら三人の前の前には見えない壁のようなものがあり、雛苺は完全に閉じ込められたようだ。

ギンギン「どういう理屈か知らないけど、貴方達はそこで指をくわえて見てるしかないようねえ。」

さあ、雛苺。早く怪人になってかかってきなさい！」

翠星石「あの野郎。チビチビが怪人だとかぬかしやがったです。」

真紅「まさか？でもそれなら辻褃が合う・・・。」

ジュン「何言ってるんだ。真紅。しっかりしろよ。早く雛苺を助けないと。」

翠星石「こうなったら蒼星石！」

二ヨキ。

蒼星石「僕の出番か。」

翠星石「回転微塵切りですう！ほー！」

蒼星石は駒のように回転して、鉄で得体のしれない壁を切り刻む。

カッカッカ。

蒼星石「ダメだね。びくともしないよ。」

ジュン「使えないな。蒼星石。」

真紅「閃いたわ！」

ジュン「なんだ？」

真紅「穴を掘ればいいのよ！それか空から行けば・・・。」

ジュン「なるほど。お前にしてはましなことをいう。」

真紅「じゃあ早くシャベルで掘りなさい。」

ジュン「お前は掘らないのか？」

真紅「当たり前でしょ。早くしなさい。」

ジュン「この非常事態に・・・。」

蒼星石「僕に任せて！」

蒼星石はドリルようになって鉄で穴を掘りはじめた。

翠星石「さすが蒼星石ですう！なんでもできるですう！」

ジュン「おい。翠星石。これ以上は痛々しくて見てられないからやめておけよ。」

翠星石「だ・か・ら！お前がこうやれって言ったんじゃないからか！」

バシッ！翠星石がジュンからもらった台本をジュンに投げつける。

そんなことをしている間に雛苺は、ギンギン燈に痛めつけられていた。

雛苺「ぶぎゃん！痛いのー！」

ギンギン「諦めて変身するのよ！」

雛苺「苺わたち！」

ギンギン「そんなもの効かないと何度言えば分かるのぉ！」

ギンギン燈はわたちに絡まれると、どこから飛んでくる羽に当たり燃え上がる。

そうしてわたちも燃えて用をなさなくなっていた。

水銀燈「ちつ。全く世話の焼けるロボットねえ。」

ギンギン燈は、水銀燈と交信する。

水銀燈「人質？確かに有効かもしれないわねえ……。いいわ。許可するからやりなさい。」

ギンギン「雛苺。これを見なさい！」

ギンギン燈の手にはひよこの人形が握られていた。

雛苺「あー！ひよこさんなのー！」

ひよっこー「ピーぴよぴよ。俺様は怪人ひよっこーさまだー！変なロボットにつかまって

大ピンチ！誰か心優しいドールが俺様を助けてくれないかなー。」

雛苺「これは大変なのー！」

ベリーベル「雛苺様。あれは罠ですよ。」

雛苺「でもひよこさんが潰されそうよ?」

ベリーベル「ゲルに決まっていますよ。見てください。あのヒヨコのひねくれた顔。」

ギンギン「何ぶつぶつ言ってるのお?ほら。早く変身しないと潰しちゃうわよお?」

?「そこまでにするかしら!」

ギンギン燈は突如まばゆい光に包まれる。

ギンギン「ま、まぶしい!さては金糸雀!」

金糸雀「よく分かったかしら!さあカナが来たからには観念するかしら!」

ギンギン「どうやってここに入ったのお?」

金糸雀「どこって普通に、降りてきただけかしら。」

ジュン「おい。翠星石。上から行けるっばいぞ。」

蒼星石「ふう。通りでいくら掘っても中に入れないと思ったよ。」

翠星石「よしそうときまったら、みんなで屋根に登ってジャンプですう!」

真紅「早くいかないと見せ場がとられるわ！」

ダツダツダ。大慌てで家をよじ登る桜田家の三馬鹿。

雛苺「カナー助けに来てくれたのー？」

金系雀「勿論かしら。カナはヒナがピンチの時にはいつでも駆けつけるかしら！」

ギンギン「なあにそれは？くだらない友情ごっこねえ。」

金系雀「黙るかしら！他の連中はともかくヒナだけは絶対守るかしら！」

ギンギン「何がそこまで貴方を駆り立てるのか知らないけど、つくづく貴方もおばかさん

よねえ。」

金系雀「いいかしら！みんながなにやら特殊能力を身につけたように、カナも悪い博士

につかまって改造してもらったかしら！

名づけてサイボーグ、カナカナニン。」

雛苺「すごいの！カナかつこいいの。」

金系雀「ふふふ。ではいくかしら。この脚についている加速装置（ただのジュンから強奪したローラースケート）で・・・。」

ギンギン「か、加速装置ですって？」

ポチっ。ドオォー！

金糸雀「うわああ。暴走したかしらー！」

ギンギン「あ、危ない。こっちにこないでー！」

金糸雀「そうはいつでも急には止まれないかしらー！」ガッツン！

金糸雀の頭突きがギンギン燈に決まる。

金糸雀「頭が痛いかしらー・・・。」

ギンギン「ぐーむ・・・なんたる石頭。」よろよろ。

何事もなかったかのように金糸雀は雛苺に近づき囁く。

金糸雀「ヒナ、カナが今から隙を作るから変身するかしら。」

雛苺「うゆ？でも人が見てる前では変身できないの。それに今変身したら正体が・・・。」

ベリーベル「うおっほん。雛苺様。ここは金糸雀に任せましょうか。」

雛苺「いいの？」

ベリーベル「ええ・・・。（どうせまたピチカートのやつの仕業ですからね・・・。）

忌々しいことだ。」

金糸雀「話は決まったかしら？大丈夫。カナに任せておけば万事OKかしら！

それっ！煙玉！」

ボオォーン！

金糸雀「そら！今かしら！」

雛苺「ストロベリーチェンジ！」ピカピカピカーン！

金糸雀（よしっ。カナも変身かしら。）

もくもくもく。

ギンギン「何これ？何も見えないわぁ。」

ベリーベル「雛苺様。お辛いでしょうが速攻でひよっこを倒さなければ状況が悪く一方です。

今なら幸い煙で隠れておりますから、電光切りで勝負をつけてください。」

苺仮面「でも、電光切りを撃つても、煙に光が屈折させられて狙いが定まらないのよ。」

ベリーベル「なんですと？」

金系雀「何してるかしら？さっさとするかしら。」

そこには雛苺の格好をした金系雀がいた。

苺仮面「あつ、ヒナがいるの。」

金系雀「これではうちりでしょ？カナってやっぱり頭がいいかしら！」

ベリーベル「いいですか。雛苺様。」

苺仮面「うい？」

ベリーベル「ならば亜空間の力を借りるしかありません。」

苺仮面「普通に出てってやつつけたらダメなの？」

ベリーベル「近くにはあのおぞましい水銀燈がいるのですよ。どんなに汚い手を使って

くるんだか分ったものではありません。

いいですか。まだ貴方様御自身の体ごと亜空間突入するすることはできません。

ですが、それに限りなく近いことならできます。

光のパワーを自分の体に溜めこむのです。トゥモエブレードと同じ要領で！」

苺仮面「すごいー。」

ベリーベル「貴方様がそれをやるんですよ。本当に分かっているのですか？」

それくらいなら可能はずです。

そうすれば貴方は光の如き速さで動けます。

ただしそれをやるとトウモエブレードが一時的に使えなくなります。

「

苺仮面「そうなの？じゃあ意味がないのよ。」

ベリーベル「平気です。要は先ほどの金糸雀と同じことですから。頭突きをなさればいいのですよ。」

苺仮面「うーい。じゃやってみるの。トウモエブレード、亜空間モード！」キラッ！

トウモエブレードに集まった光がだんだん苺仮面の体のほうに移動していく。

苺仮面「ヒナ光ってるの。」

金糸雀「ヒナかつこいいかしらー！うらやましいかしら。」

そう言いながらも金糸雀はどんどん煙幕を投げまくっている。

この調子では、雛苺に変装した意味がないかもしれない。

苺仮面「亜空間突入！いくのよー！」

ビシューン！苺仮面は、一筋の電光となる。

ギンギン「全く何も見えないじゃなあい。つまらないわあ。」

ひよっこー「ん？今何か光ったような気がするぴよっよー。」

莓仮面「十・萌・弾！ぴゃあー！」

ひよっこー「ぴよ？ぴよよ？・・・おのゝれゝ！」ドッカーン！

莓仮面はひよっこーの体を貫きそのまま桜田家を覆っていたバリアを突き抜ける。

莓仮面「変身解除なの！」シューン。

ベリーベル「雛苺様。のりのりでございましたね。」

雛苺「うまくいったの。」

ベリーベル「ええ・・・ところで私はちと用事があるのでこれで、失礼させていただきます。また後ほど。」

雛苺「うゆ？いつてらっしゃいな。」

第六幕：人工精靈攻防戦

金糸雀は金糸雀でうまく？やっていた。

金糸雀「さあさあ注目注目！」パンパン！

ギンギン「ん？あれは雛苺？」

金糸雀「そうかしら。カナはヒナかしら。ヒナが怪人だったなんてことは全く

根も葉もないうそっぱちだったかしら・・・なの。

それでは皆様方ご機嫌ようかし・・・なの。」

そう言つて金糸雀は、ふわふわと傘で飛んでいった。

ギンギン「あんな恰好して金糸雀は一体ここに何しにきたんだか。ん？そういえば

ひよっこーが見当たらないわね？」

そしてちよつと前に戻り桜田家の三馬鹿の様子を見てみると。

ジユン「くそー。下が煙で全然見えないぞ。」

真紅「翠星石。早くジャンプして雛苺を助けに行きなさい。」

翠星石「どうして翠星石が？お前が行けばいいじゃねえですか！」

真紅「嫌よ。考えてたらこんなところからジャンプしたらぺしゃんこだわ。」

翠星石「じゃあ翠星石だって嫌ですよ。」

真紅「わがまま言っていないで早く行きなさい。私の家来が心配だわ。」

翠星石「だからだったらお前が行けばいいじゃないですか。」

蒼星石「そうだよ。真紅が行きなよ。」

翠星石「多数決で決まりですね。ほらとつといくですよ。」

真紅「それ貴方の腹話術じゃないのよ。そんなのずるいわ。」

翠星石「お前は蒼星石を侮辱しようっていうのですか？」

蒼星石「君がそんな奴だったとはがっかりだよ。真紅。」

あーだこーだ！

ジュン「うるさいな！雛苺が危ない時に何やってるんだ！いいから二人ともいけ！」

ドカッドカッ！

真紅「うわー！」

翠星石「なにするですうー！」

ピュー！グシャ。

ジュン「くそー。下の様子が見えないぞ。おーい！真紅！翠星石！無事かー！

雛苺ー！返事してくれー！」

ふわふわ。その言葉にこたえるようにして金糸雀が浮いてきた。

金糸雀「あつ、ジュンかしら。」

ジュン「あれ？金糸雀じゃないか。雛苺みたいな恰好してどうした？」

金糸雀「何言ってるかしら！カナはヒナかしら！」

ジュン「そうなのか？ところで下の様子どうなってる？雛苺は無事なのか？」

金糸雀「カナの完璧な作戦のおかげですべてうまくいったかしら！・・・ん？

ああちよつと用事あるのでこれで失礼。」

ジュン「そうか。無事か。よかったよかった。」

この後、水銀燈と真紅が慣れ合いアリスゲームを適当にやってこの日の騒動は終わりを告げた。

ベリーベル「いるんでしょう？ピチカート。」

闇から黄色い光が出現する。ここはnのフィールド。

ピチカート「よく分かりましたね。」

ベリーベル「嫌味のつもりですか？それくらい私にだって分かりますよ。」

あまり調子に乗らないでいただきたいものですな。」

ピチカート「私が調子に乗ってる？なぜそう思うのです？」

ベリーベル「いい加減その澄ました態度をやめたらどうなのですか？」

ベリーベルは、なぜかいらしているようだった。

ピチカート「私は澄ましているつもりはないのですが、お気に障りましたか。」

ベリーベル「さわったね。まあいい。そんなことはどうでもいいです。」

どうでもいいのなら止してほしいものだ。ピチカートは思った。

ピチカート「私に用があるのでしょう？」

ベリーベル「あります。単刀直入にいいいますが、これ以上私たちにちよっかいを出

さないでいただきたい。」

ピチカートは肩をすくめた。

ピチカート「おや？それはいいかがりではありませんか？私たちはむしろ貴方がたのサポートをしたつもりでしたが。」

ベリーベル「大きな口を叩かないことです。私たちをサポート？一つ言っておき

ますがね。ピチカート。」

ピチカート「なんででしょう？」

ベリーベル「なんでも貴様の思い通りになると思ったら大間違いですよ？

・・いいから手を引け。これは私と雛苺様の問題だ。」

ベリーベルは不自然に狼狽している。

彼女（彼？）はピチカートに対して劣等意識を持っているためである。

ピチカート「何をそんなに焦っているのです？言葉遣いが乱れておりますよ。」

ベリーベル「焦ってなどいない・・。だが・・。いや失礼。私ともあるうものが。」

ともかく私たちに干渉するのをやめていただきたい。」

ピチカート「それは同意しかねますね。私は金糸雀様の要望に従っただけですから
。」

ベリーベル「どうあっても？」

ピチカート「無論です。」

ベリーベル「・・・なら貴方には消えてもらいましょうか。」

ザザっ！ベリーベルの合図で怪人達に囲まれるピチカート。

ピチカート「貴方のお友達ですか？これから仲良くパーティーでも開こうとでも？」

ベリーベル「余裕ぶってられるのも今のうちですよ。ひよひよ！賢い貴方が

こんなに簡単な罠にかかるなんてねえ・・・。

ふん！私と貴方は仲間だとも思っていたのですか？
貴方も案外と知恵が回らないことだ。」

ピチカート「貴方は私の仲間でしょう。同じ人工精霊なのですから。」

ベリーベル「私は貴方のそういう澄ました言い回しが大嫌いなのですよ。」

ピチカート「それは残念です。私は結構貴方のことが気に入ってるのですけどね。」

ベリーベル「そういうところが嫌いだといってるのです。もういいおいつ。やれ！」

金糸雀「分かったかしら！破壊のシンフォニー！」ブオブオ！

金糸雀の発生させた竜巻にどんどん吹き飛ばされていく怪人達。

ベリーベル「なに？」

ピチカート「どうも貴方は、裏で怪人達と繋がっているようですね。」

ベリーベル「馬鹿な！ドールと連絡をとってるそぶりなどなかったはずだ！」

金糸雀「私とピチカートの信頼関係をそん所そこのドールと比べてもらっては困るかしら！」

ピチカート「そういうことですよ。・・・でどうしますか？」

ベリーベル「・・・好きにしたらいいでしょう。」

ベリーベルはぐつたりと肩を落とした。

金糸雀「じゃ帰るかしら。ピチカート。」

ピチカート「仰せのままに。」

ベリーベル「私を見逃すのですか？」

ピチカート「ベリーベル、私からも一つ言っておくことがあります。」

ベリーベル「なんですか？」

ピチカート「ドールとの信頼関係を大切にしてください。友人である私からの頼みです。」

そう言い残して消えていく、金糸雀とピチカート。

ベリーベル「ひよ．．．ひよひよ．．．この私をここまでこけにするとはね．．．」

私を見逃したことをいつか思い知らせてやりますよ．．．」

ベリーベルは新たな決意に燃える。それに巻き込まれる雛苺はいい迷惑というものだった。

それからというもののベリーベルは、どうしたらあの小憎らしい人工精霊

をぎゃふんと言わせることが考えていた。

どうも当初の目的とずれてきてるようである。もっとも当初の目的すら今だ謎につつまれているが。

雛苺「ベリーベル。最近元気ないねー。」

ベリーベル「放つといてくださいよ。私は貴方様と違って能天気じゃないのですから。」

雛苺「そんなこと言うと遊んであげないのよ。」

ベリーベル「お生憎様。結構ですよ。」

雛苺「びえーん！ベリーベルがくれたのー！」じたばた。

真紅「騒がしいわね。だからいつてるでしょう。人工精霊はよくしつけておきなさい
つて。」

ジュン「うるさいな……。僕の平和な時間を奪わないでくれよ。大
体何でお前らは
また僕の部屋にたむろしてるんだよ。」

翠星石「全くチビチビも、ベリーベルも無能ですう。」

ベリーベルはなに？と癪に障った顔をしたが、さすがにドールにつ
つかろうという気
にはなれない。

雛苺の命令があれば別だが……。といっても普段ベリーベルは雛苺の
命令など聞かない。

ジュン「いいからでてけよ！」

ドールたちはジュンに部屋から追い出された。

翠星石「とんだとばかりですう。これもすべてチビチビが悪いで
す。」

真紅「全く家来が無能だと困るわね。」

雛苺「うう……。だってベリーベルが……。」

翠星石「人工精霊くらいちゃんと管理しやがれですう！」

仕方ないので、ドールたちは廊下で遊ぶことにした。

真紅はぺらぺらと本をめくっている。

雛苺と翠星石はおはじきをしているようだ。

翠星石「そーら。チビチビの番ですよ。イヒヒ……。」

雛苺「うにゅ……。うーとうーと。」

翠星石「さあどうしたです？早くするです。」

雛苺は翠星石に異様なプレッシャーをかけられる。

翠星石はイヒヒいいながら、怖い顔をで手をわらわらせて雛苺迫る。

雛苺「ず、ずるいの！ヒナを怖がらせちゃダメなの！」

翠星石「何言ってるんです？これが翠星石の普通です。お前が勝手に怖がるのが悪いですよ。」

ニヨキ。

蒼星石「そんな普通ってあるのかな……。」

ボタン。本を閉じる音が聞こえる。

翠星石「ん？どうかしたです？真紅。」

真紅「雛苺。正直に言っしてほしいのだけど。」

雛苺「な、なに？」

真紅「貴方最近よく散歩にいくわよね。途中で私からのエネルギー供給が途絶えることがあるのだけどこれはどうして？」

雛苺はあれ以来、怪人達を倒しまくっており、そのおかげで怪人騒ぎは徐々に鎮圧化していつている。

雛苺にわざわざ倒されに来る志願者などもいて、そういうものは雛苺が願うだけで、怪人化が解けるのだった。

つまり今残ってる怪人は、どれも凶暴な輩ばかりであるともいえる。

翠星石「そんなことがあるですか？不思議ですう。」

真紅「そうよ。不思議なことこの上ないわ。考えたくはないけど貴方もしかして・・・。」

雛苺「わわっ！ヒナちよつと用事を思い出したの！じゃ、じゃあまたね！」

ダダダ！

真紅「ちよつと話はまだ・・・。」

翠星石「いつちまいましたね。でも真紅。雛苺のことは本人に任せるって。」

真紅「でもアリスゲームに関連することなら放つても置けないわ。」

翠星石「そりやそうですが、関連するですかね？」

真紅「それは直接聞かないと何とも分からないわね。」

雛苺は別に用もなかったが、庭に出てくるくるくると同じ場所を行ったり来たり、行ったり来たりしていた。

雛苺「うゆ・・・。ベリーベル。何か真紅がヒナのこと疑ってるの。どうしよう?。」

ベリーベル「いや。さっきは見事に誤魔化せたじゃないですか。お見事なものでしたよ。」

雛苺「そう?。」

ベリーベル「そうですとも。」

雛苺「わーい。じゃあヒナ頑張って誤魔化す・・・ねえ。ベリーベル。」

ベリーベル「なんですか？言っておきますが、誤魔化さずに済む方法なんてありませんよ。」

雛苺「うにゅ……。そういえばカナはヒナの事情知ってたようだけどうして？」

ベリーベル「ふん！そんなこと私にはわかりませんね！」

雛苺「なんで怒ってるの？」

ベリーベル「さて？なんででしょうねえ？ちよつと私は考え事をするのでしばらく

話しかけないでもらえますか。」

雛苺「うう……。またベリーベルがぐれちゃってるの……。」

わーわーわめく雛苺を尻目に、ベリーベルは考え込んでいる。

雛苺「ねーねー！ベリーベル！」

ベリーベル「……。」

雛苺「もったいの！ベリーベルなんて知らないのよ。」

雛苺はそう言い放って、ちらちらとベリーベルのほうを気にしながら、ちようちよを追

っかけたり、蟻を眺めたりして遊んでいた。

雛苺「あれ？なんだか今回は多めのね・・・。」

雛苺は怪人の気配を察知した。今の雛苺は変身しなくてもそれらの気配が察知できるようになっている。

どうやら怪人は複数それも相当の数が一か所に集まってるようだった。

雛苺「ねえ。ベリーベル。なんだか変なのよ。」

ベリーベル「なんですか？話しかけないでほしいのですが。」

その言葉に雛苺はいじけた。

雛苺「・・・やっぱりいいの。ベリーベルなんていなくなっただけで一人でもなるの。」

ベリーベル「ほっほー？左様でございますかね。」

雛苺「そうなのよ！ベリーベルはずっと考え事でもしてればいいの！」

タッタッタ。

ベリーベル「・・・雛苺様。闘争本能の影響を受けてきつつあるのでしょうか。」

随分と物をはつきり言うようになりましたが・・・。」

第七幕：力と代償

ベリーベルがいらないことで不安を感じている雛苺であったが、何しろ雛苺が早くいか
なければ、1・他のローゼンメイデンが怪人を倒すと人形に戻らなくなる。

2・怪人達が嫌がらせしだして迷惑をかける。
という事態が起こるので、雛苺は何度か後ろを見てベリーベルが来ているか確認したが
、いつしか諦めて足を速めていた。

雛苺が現場に来てみると、すでに真紅とジュンが怪人たちの目の前に立ちふさがっていた。

真紅「久々にでたわね。それにしてもすごい数だわ。」

ジュン「こんなことなら翠星石もつれてくるんだっただな・・・大丈夫なのか？これ。」

真紅「無理よ。」

ジュン「じゃあどうする？逃げるか？」

真紅「翠星石も時期に気づいて駆けつけるはずだわ。それまで私たちでなんとかしましょう。」

二人が狼狽してるらしき様子を怪人のボスらしき人物が、愉快そう

に眺めていた。

怪人にやー・ごー「にゃごこそは、怪人四天王の一人、カリスマ怪人にやー・ごー
なのだ。

ローゼンメイデンの真紅。今日こそぼっこぼこにしてやるにゃ。」

真紅「よりによって猫の怪人だなんて……。なんというおぞましさなの……。」

ジュン「おい、真紅！ぼやっとするなよ。怪人達がどんどん近付いてきてるぞ！」

真紅「いいわ。相手が猫なら手加減なしでぼっこにできるものね！」

ジュン「いいけどな。僕の体力のことも考えてくれよ。」

これはまずいと雛苺は思った。真紅に倒された怪人は人形に戻れなくなってしまうのだ。

雛苺「ストロベリーチェンジ！」ピカピカピカーン！

雛苺は変身し、真紅のところまで駆ける。

にゃー・ごー「あれはにゃんだご？」

苺仮面「真紅！」

真紅「ん？」

振り返る真紅。

莓仮面「トウモエブレード、電光切り、ぴゃー！」シュイン！シュイン！

真紅「どわっ！？」

真紅は、光の束に包まれ動けなくなる。

真紅「くっ……。また貴方なの？」

ジyun「ああっ！真紅！」

その様子を見てにゃー・ごーは大喜び。

にゃー・ごー「よくやったにゃー」。それ今のうちにゃー。やってしまっにゃー！」

怪人A「それー！」

怪人B「どうしたどうしたー！」

莓仮面「まずいの！真紅が危ないの！」

カッキン！

怪人A B「どうわー！」

吹き飛ばす怪人AとB、そして……

蒼星石「遅れたね。」

青薔薇と共にさっそうと登場したのは、翠星石とそれが操るマリオネットの蒼星石の二人組。

ジュン「翠星石！来てくれたか！」

翠星石「あたりめえです。真紅はやらせねえですよ！」

ジュン「翠星石。あそこにいる変態仮面が真紅に不意打ちしてきたんだ。」

言われて翠星石は苺仮面のほうをじつと見る。

苺仮面「う、うにゅ……。あの……。その……。」

翠星石「やい！変態マスク！」

苺仮面「ヒ、ヒナ変態じゃないの！」

翠星石「どうでもいいですう！真紅は守ってやるですから、お前には怪人を任せるです！」

「

真紅「何を言ってるの？翠星石。あの子も怪人よ。」

翠星石「そんなことは分かってるですよ。真紅。今回は翠星石に任せがれです。」

雛苺のほうに向きなおる翠星石。

翠星石「変態マスク。翠星石はお前とよく似た人形を知ってるです。翠星石はいつもそいつにいじわるしちまうですが、本当はいつも感謝してるです。」

蒼星石がいなくなってもそいつがいたから翠星石は、毎日笑っていられたです。」

莓仮面「翠星石・・・。」

翠星石「お前にいうことはもうねえです。」

ともかく、真紅とついでにチビ人間もは翠星石と蒼星石がばっちりがつちり守

つとしてやるですから、お前はお前の成すことをするですよ!」

莓仮面「ヒナが成すこと・・・。分かったの! 翠星石! ありがとうなの!」

その言葉を聞いて、翠星石は静かにほほ笑んだ。

翠星石「聞いた通りですう! 怪人ども、真紅とチビ人間には指一本たりとも触れさせねえですよ!」

真紅「翠星石、一体何を?」

ジュン「真紅、どうやら翠星石には考えがあるようだな。」

にゃー・ごー「愚かなにゃことをいうものなのだ。そこの怪人はお

前の仲間を攻撃した
にゃごよ。」

莓仮面「猫さん！猫さんの相手はヒナなの！」

にゃー・ごー「・・・そういえばよく見てみたらお前は裏切り者の変態仮面にゃごね。

ちようどいいにゃごローゼンメイデンも変態仮面も、にゃごには必要ないご。

部下どもあいつらをぶん殴ってやるにゃ！」

怪人A「殴っちゃうぞー！」

怪人B「ぼつこだあー！」

莓仮面「トウモエブレード亜空間モード発動！」

雛莓の体が光り輝く。

莓仮面「十・萌・弾！ぴゃー！」ドピューン！

にゃー・ごーめがけて超突進をする莓仮面。

ボン！ボン！ボン！ボン！

その射線上にいた怪人達は次々に爆発していく。

そして、最後ににゃー・ごーを貫く。

にゃー・ごー「にゃにゃ・・・にゃにゃ・・・にゃーごー！」ドカン！

葛仮面「やった！」

にやりと笑う怪人にやー・ごー。

葛仮面「え？」

にやー・ごー「おしかったにやごね。でもその程度の闘争エネルギーじゃ、にやごは倒せないご。」

なんてったってにやごの闘争エネルギーは果てしないごよ。」

そうしてにやー・ごーはにやーと鳴くと、どこからともかく怪人達がぞろぞろと集まってきた。

にやー・ごー「とはいえ、にやごも随分エネルギーを使ってしまったにや。
今日はもう帰るにやご。後は適当ににやごが用意した人形の相手でもしてるにや。」

葛仮面「ま、待つの！」

にやー・ごー「また会おう。変態仮面。」

にやー・ごーは、やがて怪人達にさえぎられ行く先が見えなくなってしまった。

怪人達「ぐおー！」

莓仮面「び・・・びえ！」

莓仮面は、慌てて翠星石の後ろに隠れた。

翠星石「お前はなにやってるです？さっさとさっきのボス玉を追いやがれです！」

莓仮面「そ、そんなこといわれても・・・。」

翠星石「じゃあ翠星石が追いかけてやつつけちまってもいいです？」

莓仮面「ダメ！それは絶対ダメ！」

蒼星石「変態マスク。まだ彼を追うことはできるよ。」

莓仮面「うにゅ？」

蒼星石「僕の鉄を貸してあげる。これで血路を開いて、彼に追いつくんだよ。」

大丈夫。この鉄には僕がありったけの力を込めているから。
本当は僕もついてあげたいけど僕はここを動けないからね。」

真紅「ちよつと！翠星石！」

翠星石「黙ってるですよ。真紅。翠星石に任せろと言ったはずですよ。」

真紅（そういつても、このまま黙って見ていたら、私達が危なくなる気がするのだけど・・・。）

苺仮面「でもそうしたら、蒼星石が素手になっちゃうの。」

蒼星石「僕のことは心配しないで、この程度で根は上げないよ。さあもういくんだ。ここは任せて。」

翠星石「そうですよ。行って決めてきやがれですう！」

そんなこと言ってる間にも、わらわらと怪人達がよって来る。

苺仮面「ありがとう。翠星石。蒼星石。ヒナ絶対決めるから！」

雛苺は、鋏を手に取り駆けた。

その鋏は雛苺には大きめのサイズだったかもしれない。群がる怪人達。

雛苺が鋏を掲げると、巨木が発生し、怪人達を拘束する。

その隙に苺仮面は囲みを突破した。

蒼星石「さてかっこつけたはいいものの・・・。」

翠星石「どうしたらいいですかね？この状況は。」

真紅「やっぱり何も考えてなかったのね・・・。どうしてあんな行動を？」

ジュン「そんなことよりも、あいつなんだか猫怪人と敵対してるっばかったんだから、

真紅の拘束解いてもらえばよかったじゃないか。」

翠星石「言われてみれば確かに……。なんでそんな肝心なこと言わねえですか！」

ジユン「お前が任せろって言ったから、任せただよ！」

それにしてもあの変態マスクも気が利かないやつだな。拘束くらい解いてから行ってくれればいいのに。」

真紅「そんなこと言ってる間に、どんどん怪人が近づいてくるわよ。」

怪人達「ぐおー！」

翠星石「ひえええ……。や、やるだけやってやるです！」

蒼星石「それでこそ翠星石。僕だってまだ諦めたわけじゃないよ！」

一方雛苺は、怪人の気配を頼りにやー・ごーを追いかけていた。

そこへ飛んでくるベリーベル。

ベリーベル「遅くなりましたか？」

苺仮面「ベリーベル！真紅達が大変なの……。」

ベリーベル「……雛苺様。今貴方が追っている怪人にやー・ごーを倒せば、その配下の人形は機能を停止します。」

莓仮面「そうなの！急がなきゃ！」

ベリーベル「亜空間突入を申請しましょう。緊急事態ですので。」

莓仮面「できるの？」

ベリーベル「おそらく可能です。亜空間突入申請。」

？「申請を許可します。」

莓仮面「うゆ？今の声って。」

ベリーベル「早くしなさい。真紅達を助けたいのでしょうか？」

莓仮面「でも今は・・・。」

ベリーベル「詮索は後です。いきましよう。」

莓仮面「う、うん・・・。」

にゃー・ごー「眠くなってきたにゃーご・・・。」

空間が割れ、突然にゃー・ごーの目の前に莓仮面が飛びだす。

にゃー・ごー「にゃ、にゃんだご？。」

シューイン！グルグルグル！

莓仮面「十・萌・斬、ぴゃー！」

ブンブンブン！ペシン！にゃー・ごーの頭にたんこぶができる。

にゃー・ごー「にゃ・・・にゃ・・・にゃあああごおおおお・・・」

にゃー・ごーは光に包まれる。

莓仮面「ごめんね。猫さん。」

にゃー・ごー「く・・・よくもやったにゃー。でも覚悟するにゃーよ。にゃごは四天王

の中では一番の小物にゃ。

へ、変態仮面、先に地獄で待ってるにゃー！」

ピッカン！シュウウウウ・・・。後には猫の人形が残った。

莓仮面「今回は、危なかったの。ベリーベル、きてくれてありがとう。」

ベリーベル「いえいえ。それよりも先ほどは申し訳ありませんでした。見苦しいところを見せてしまい・・・。」

莓仮面「いいの！ベリーベルだって悩むときくらいあるもの。」

ベリーベル「ひよひよ・・・。ありがとうございます。」

莓仮面「変身解除なの。」シューン。

ベリーベル（計画は順調ですね。あのお方の願いはかないつつあります。）

雛苺「それでね。ベリーベル。さっき話したかったことなんだけど。」

ベリーベル「おや？なんだったでしょうか？」

雛苺「全然聞いてなかったみたいね。ベリーベル何かあった？」

ベリーベル「なあに、全く大したことではありませんよ。それよりも話というのは？」

雛苺「うゆ。どうも最近いきなり眠くなることがあるの。変身して
る間は大丈夫なのよ。」

ベリーベル「いきなり眠く・・・そうですか。最初にいいましたが、
変身も万能ではありません。
変身を繰り返すことによってローゼンメイデンから徐々に離れてい
ってしまふのです。」

雛苺「そうなの？」

ベリーベル「そうなのですよ。もしかしたら寿命が削れたのかもしれ
ません。

でもまあ大丈夫でしょう。寝てしまいそうになったら変身すればいい
のですから。」

雛苺「そうね。ヒナはあとのくらい動けるの？」

ベリーベル「さあさすがにそこまでは分かりませんね。・・・しかし怖くはないのですか？」

雛苺「ヒナがいなくても真紅も翠星石もジュンだっているから大丈夫なの。だからそれまでにヒナにできる限りのことをするのよ。」

ベリーベル「でございましたね。愚問でした。・・・本音を言わせてもらいますと・・・一度しかいないからよく聞くのですよ。」

雛苺「うい。」

ベリーベル「私は貴方様があまり好きではありません・・・それでも貴方様以外のドールの精霊になることはまっぴら御免です。」

・・・ですから本当は貴方様にアリスになってもらいたい。それが私の偽らざる気持ちです。貴方様にその気がないとしても私は諦めません。

例えどんなことをしても・・・貴方様が望もうとも望むまいとも関わらず・・・。

それだけです。馬鹿な話をしました。もう忘れてください。」

雛苺はなぜか目を輝かせていた。

ベリーベル「・・・ん？」

ぴょーん！

雛苺「ベリーベルー！」

雛苺はがしつと手でベリーベルをつかんだ。

ベリーベル「な、なにをするのですか！よしてくださいよ。」

雛苺「ベリーベル、だーいすき！」

ベリーベル「全くもう・・・これだから嫌なのですよ。さあもう帰りましょう。うにゅーが
貴方様を待ってますよ。」

雛苺「うにゅーだ！帰ろう。ベリーベル。」

この後雛苺は帰ってジュンにせがみ、たらふくうにゅーを食べた。

第八幕：真紅の葛藤

そして翌朝。

真紅と翠星石は廊下で言い争いをしていた。

真紅「どうも納得いかないわ。どういうつもりだったの？」

翠星石「どうもこうもねえですよ。敵の敵は味方ってことですう。」

「

真紅「貴方あの怪人のことを雛苺と重ねてたみたいだったけど。あの怪人からは雛苺の気配はしなかったわ。」

翠星石「そりゃー・・・まあ・・・真紅はもうちょっと周りを見たほうがいいんじゃないんですねえ？」

真紅「どういう意味かしら？」

翠星石「別に・・・。」

真紅「はっきりにいいなさいよ。」

翠星石「なんでもねーですよ。」

真紅は翠星石につっかかるが、翠星石は真紅の視線を横にそらしている。

真紅「私だって雛苺のことはちゃんと考えてるわ。」

翠星石「行動しなきゃ伝わらねーですう。」

真紅「でも確信が・・・。」

翠星石「私が思うに・・・間違えちゃったら間違えちゃったごめん！てへ！つていえばいいんじゃないですか？」

真紅「なんで私がそんなこと言わなきゃならないの？」

二ヨキ

蒼星石「真紅。今のは例えだよ。そのまんま言えって意味じゃないよ。」

真紅「分かってるわよ。そんなことくらい私にだって・・・。」

真紅は立ち上がる。

翠星石「どこにいくです？」

真紅「行動をしに行くのよ。」

翠星石「そうですか。」

トトトト。

真紅「あっそうそう。翠星石。」

真紅は翠星石に背を向けたまま話す。

翠星石「なんです?」

真紅「ありがとうね。」

翠星石「何がです?」

真紅「いやいいわ。じゃあいつてくるから。」

トコトコ。ガチャ。真紅がジュンの部屋に入り消えていった。

翠星石「ふいー。翠星石はチビ人間とでも遊んでやるです。」

蒼星石「新しいマリオネット技術でも教えてもらおうよ。」

翠星石「それがいいです! いいアイデアですよ。蒼星石!」

翠星石達も、ジュンの部屋に入る。

真紅「雛苺。こっちにきなさい。」

雛苺「うい?」

真紅「いいからくるのよ!」

翠星石達が部屋に入ってみると、部屋でジュンにじゃれついていた雛苺が真紅にひっぱ

られて、渋い顔で連行されていくところだった。

ジュン「おい。どこにいくんだよ。」

真紅「雛苺に必要なことよ。」

ジュン「なんだそれは？」

翠星石「いいじゃねーですか。チビ人間。そんなことより翠星石にマリオネットを教えるです。」

ジュン「それは構わないが、あつ真紅。」

真紅と雛苺は部屋に外に出ていつてしまったようだ。

ジュン「いつになく強引だったなあいつ。」

特訓の場に着く。ここはnのフィールド。

真紅「さあ、雛苺。特訓よ！」

雛苺「ういー。。。」

雛苺はものすごくやる気がなさそうだった。

真紅「もっと気合を入れてもらわないと困るわ。」

雛苺「でも真紅。一体こんなところで何をやるの？」

真紅「亜空間移動を自在にこなす特訓よ！」

雛苺「う、うい？」

真紅「亜空間というのは、nのフィールドの一種だね。光をエネルギーに変換させることができる道具があるのなら、自在に亜空間を作り出すことができる。そうなれば一瞬でどこでも移動できて便利って寸法よ。」

雛苺「それは分かったけど、どうしてヒナがそんなのを扱う特訓をしないといけないの？」

真紅「貴方に必要だからよ。貴方が私たちに何を隠しているのか。それは問わないわ。私は貴方を信頼しているからね。でも貴方は私の家来なのだから、家来の面倒は主人が見るのは当然だね。」

雛苺「うにゅ……。ねえ真紅。」

真紅「なに？」

雛苺「うまくいったらご褒美にうにゅーちょうだい。」

真紅「ダメよ。甘ったれないでほしいわね。」

雛苺「真紅のけちんぼ！」

雛苺はぶーぶーいいながら、真紅のスパルタ特訓につきあった。

そして数日後。

ジュン「なあ、お前達。最近例の鏡に閉じこもってるみたいだが、何やってるんだ？」

真紅「秘密よ。」

ジュン「けちだな。教えてくれたもいいだろ。なあ雛苺。」

雛苺「ダメなの。秘密よねー。真紅。」

真紅「そういうことね。」

翠星石（わだかまりは解けたみてえです。吹っ切れたですね。真紅。後は翠星石自身の問題ですか・・・。）

真紅「雛苺。今日も特訓よ！あと少しだわ！」

雛苺「うい！」

真紅の特訓は毎日続いた。

真紅「とりゃー！」

雛苺「だあ！」

真紅「ん？これはローゼンコール。」

雛苺「どうしたの？」

真紅「・・・どうやら翠星石が怪人と交戦中みたいね。」

雛苺「そうなの！じゃあ早くいかないと！」

真紅「ええそうね。どうやら翠星石の苦戦してるようよ。でも雛苺。貴方はもう少しここで練習してなさい。」

雛苺「で、でもヒナが行かないと・・・。」

真紅「分かってるわ。でも今の貴方じゃ勝てないかもしれない。翠星石が苦戦してるくらいなもの。後は技を煮詰めるだけだし、私は一足早くいつてるから貴方も技が完成したらきなさい。」

雛苺「・・・。」

真紅「大丈夫よ。倒しはしないわ。」

雛苺「！」

真紅「じゃあまた後でね。」

タッタッタ・・・ 駆ける真紅。

雛苺「真紅・・・。」

第九幕：力の目覚め

少し前に戻る。翠星石は家でジュンと一緒にくんくんを見ていた。

翠星石「最近はなーんかくくんくん元気ねーですね。」

ジュン「そうか？僕には普通に見えるが。」

くんくん「翠星石！」

翠星石「どうしたです？くんくん。」

ジュン「テ、テレビが話しかけたきたぞ！」ドシャン！

ジュンは後ろに倒れて腰を抜かした。

くんくん「そこにいる人大丈夫かな？」

翠星石「あー・・・これは放つといていいです。それでどうかしたです？」

くんくん「実は僕の偽物が君の家に来ているのだ。それをやっつけてほしい。」

くんくんからのお願いだよ。ではよろしくくんくん！」

パチン。テレビが消えた。

翠星石「図々しい奴ですう。一方的に用件を告げて消えやがったです。」

翠星石は腹が立ったのでテレビのスイッチを何度も入れたがつかなかった。

翠星石「つかねーですう！後でくんくんに苦情の手紙100通送ってやるです！」

全部真紅に書かせるです！」

そうして翠星石は転がってるジユンの背中を蹴った。

翠星石「いつまで寝てるですか！ほらさっさといくです！」

ジユン「痛いな！性悪人形！いくつてどこにだよ！」

翠星石「だから庭です！お前は一体何を聞いてやがったですか！」

翠星石に引きずられながらジユンは庭へと向かった。

？「ははー！よく来たなー！」

翠星石「お前がくんくんの偽物とやらですか？」

？「我こそは怪人四天王の一、戦闘怪人犬くんくん様だー！」

翠星石「お前ですか。家のテレビをつかなくしたのは！」

犬くんくん様「だったらどうする？やるのか？」

翠星石「とつちめてやるです！蒼星石！」

二ヨキ。

蒼星石「出番だね。くんと戦うのは気が引けるけど、戦いとならば容赦はしないよ。」

犬くんくん様「ほざくな！青二才！」

蒼星石「確かに僕は青いけど・・・未熟者ではないつもりだよ。」

シュン！シュン！

消える蒼星石とくくんくん。

カキン！交差するくんくんの爪と蒼星石の鋏。

シャチ！

蒼星石「早さは互角のようだね。」

犬くんくん様「どうかな？」

蒼星石「まさかまだ上があるとでも？」

翠星石「はったりですう！」

犬くんくん様「現実というものを見せてやる！」

シュン！シュン！犬くんくん様はさらに速く動く。

蒼星石（く・・僕より速い！翠星石！フォローを！）

翠星石「スイドリーム！蒼星石を援護するです！」

犬くんくんの足を木の根が絡めようとするが動きが早すぎる。

翠星石「く・・。」

ジュン「おい。まずいんじゃないか？マリオネット代ろうか？」

翠星石「お前じゃ技術はあってもあの速さにはついていけねえですよ。」

ジュン「でも蒼星石が・・。」

蒼星石は、腕、足、肩などを切り刻まれもう満身創痍だった。

犬くんくん様「そろそろ限界か？」

蒼星石「なめないでもらおうか！」

蒼星石は、致命打だけは何とか避けているが、このままでは体がずたばろになってしまふ。

ジュン「これ以上はまずい！早く来い！真紅！」

ガラ！

真紅「ローズ・レイン！」

真紅は上空に向かって薔薇の花弁を大量に放つ。薔薇の花弁はしばらく空中に浮遊したのち、くんくん目がけて針のようにして降り注ぐ。

犬くんくん様「ぐ！」

真紅「！」

真紅は、自分が攻撃しようとしている相手がくんくんだと気づきためらった。

心持ち真紅の攻撃が緩やかになる。

犬くんくん様が狼狽している隙に、蒼星石は翠星石のところに戻ってくる。

翠星石「蒼星石……。」

蒼星石「……。」

ジュン「翠星石。後は真紅に任せておけ。」

翠星石「すまんです。蒼星石。」

蒼星石「……。」

二人は対峙する。

真紅「くんくん……。」

犬くんくん様「真紅か。」

真紅「私に分かるの？」

犬くんくん様「まあな・・・お前とは戦いたくなかったが・・・仕方あるまい。

・・・いくぞ。」

真紅「いいわ。来なさい。」

水平にステッキを構える真紅。

犬くんくん様は高速移動をし、真紅に接近する。真紅はずっと下を見ている。

犬くんくん様（なぜ動かない？僕がくくんだから遠慮をしているのか？どうする・・・。

いや・・・やるしかない。）

犬くんくん様「さらばだ。真紅。」

真紅「悲しいことよね・・・。」

犬くんくん様が攻撃に移ろうとした瞬間、真紅のステッキが犬くんくんの体を横なぎにした。

犬くんくん様「ぶっぺっ！」ドシン。

吹き飛ばされる犬くんくん様。

犬くんくん様「な、なぜ？」

真紅「薔薇よ。地面に散らばった薔薇の動きで貴方の動きをつかんだわ。・・・でも

貴方の心に私への攻撃に迷いがなかったら結果は逆だったでしょう。

「

犬くんくん様「完敗だな・・・。やってくれ。」

真紅「最近、怪人が人形に戻る事件が続出してるけど貴方は人形に戻ることはできないの？」

犬くんくん様「それは俺も人気者のくんくんのほうがいい。でも仕方ないことだったんだ。もし真紅が我に止めを刺さないというのなら・・・。」

犬くんくん様はおもむろに自分の爪を喉につきたてようとする。ガシッ。

それを手で止める真紅。

犬くんくん様「残念だったな・・・。こんなことさえしなければ・・・今度こそさらばだ。

真紅。
「

犬くんくん様の爪が真紅の体を貫いた・・・。と思いきや空間が裂け犬くんくん様は攻撃は虚空を切った。

莓仮面「いくらくんくんでも真紅を傷つけさせないのよ!」

真紅「きたわね。」

莓仮面「真紅。後はヒナに任せるのよ!」

真紅「貴方も怪人でしょ。なら私の敵だわ。」

莓仮面「ぴよえ?」

真紅「・・・ちゃんと完成したんでしょうね? いや聞くまでもないわね。」

私は休憩してるわ。後でうにゅーでも雛莓と一緒に食べましょうかね。」

真紅は、独り言のように呟きつつ、ジュンと翠星石のところに歩いて行った。

莓仮面「真紅・・・うにゅー楽しみなの。よしっ! 今度はヒナが相手なのよ!くんくん!」

「

犬くんくん様「チビが。粹がるなよ!」

莓仮面「なんてことをいうの! こんなのかんくんじゃないの!」

犬くんくん様「お前みたいな奴相手なら我も本気を出せるといふもの。いくぞ!」

シュン！一瞬で莓仮面との間合いを詰め、爪を莓仮面の体めがけて突き刺すが空振り。

莓仮面の亜空間移動であつた。

莓仮面「トウモエブレード！亜空間モード！」キラッ！

莓仮面の体が光り輝く。

莓仮面「亜空間フィールド展開！」グワグワグワ・・・

徐々に辺りの空間がゆがみ始める。

犬くんくん様「なんだこれは？」

莓仮面「いくのよ！くんくん！亜空間無限分身！」ピカッ！

空間のゆがみ内部に莓仮面が沢山出現する。

犬くんくん様「だからどうした！全部倒せばいいまでよ！」

犬くんくん様は高速移動をしようとするが、その場ですっ転んでしまふ。

犬くんくん様「な、なんだ。まるで地に足がついてないような・・・自分がどこにいるか位置がつかめん！」

莓仮面百体「十・萌・無・幻・斬！ぴゃー！」

ぴゃー！ぴゃー！ぴゃー！ぴゃー！分身した莓仮面達がいつせいに

掛け声をあげて犬くんくん様
に向かって突撃していく。

ズシャ！ズシャ！ガシャ！ドシャ！

永遠にも続くような攻撃を繰り返す。

ブンブンブン！ペシン！最後の莓仮面の攻撃で犬くんくんの頭にたんこぶができる。

犬くんくん様「作戦成功だな。こゝこれで僕もようやく終われる・・・」
「ピカーン！」

犬くんくん様の体が光り輝く後にはくくん人形が残った。

ベリーベル（ここまでの成長は予想外！これは・・・最後の日も近い
ですね。間に合ってますよ。）

真紅「やっぱり貴方は雛苺だったのね・・・」

莓仮面「あわわ・・・。それではまた会いましょう！とう！」「シュワ！

真紅「・・・。」

ジュン「真紅。まあいいじゃないか。あれが雛苺だろうとどうであ
ろうと。そんなこと
よりだな・・・。」

翠星石「・・・。」

蒼星石「・・・。」

ジュン「翠星石。蒼星石のことなんだが。」

翠星石「なんです?。」

ジュン「もう一緒に戦うのはやめるか?。」

翠星石「・・・いや、これくらいじゃめげねえですよ! 翠星石はもっとうまくなって

強くなってやるです!。」

「」
蒼星石

翠星石「え? 今? チビ人間がやったです?。」

ジュン「なにがだ?。」

翠星石「・・・なんでもねえです。(蒼星石・・・翠星石はやってやるですよ。)」

桜田家のドールズはまた一つ大きくなった・・・ような気がした。
物語は収束へと向かっていく。

第十幕：定めと誇り

ギンギン「犬くんくん様までものが．．。」

？「」

ギンギン「分かりました．．いえつ。自分はそのために生まれてきたのですから当然であります。それではまた後ほど。」

？「」

ギンギン「．．．迷うまでもないこと。申し訳ありません。水銀燈。おさらばであります。」

ボオオ．．。

水銀燈の家から飛び出るギンギン燈。

ベリーベル「雛苺様！雛苺様ってば！」

雛苺「うゆ．．？なあに？」

ベリーベル「ついに、ギンギン燈との決着をつける日が来ました。」

雛苺「え？でもあの子はヒナを助けてくれたのに。」

ベリーベル「彼女もまた怪人だったのです。今は公園で貴方様を待

っておりますよ。」

雛苺「こんな夜中に？夜は眠りの時間なの。明日にしてくれてるよ
うに伝えてほしいの
。」

ベリーベル「無茶をおっしゃる。ギンギン燈にも事情というものがあります。

彼女とはあれから何度か戦いしましたが、助けてもらったりもしたでしょう？

まあそれは桜田家のドールたちも同じでしたが。
今度は貴方様が答える番ですよ。」

雛苺は、怪人とローゼンメイデンどちらとも戦ったり協力をしていたりした。

それは水銀燈とギンギン燈の場合も例外ではなく、何度か一緒に真紅達と戦ったりもした。

特にギンギン燈のグループとは協力することはあっても戦うことなどあまりなかった。

雛苺「ベリーベルはわがままなの。」

そっついながら雛苺は鞆から這い出てきた。ベリーベルのぐり押しな詭弁はいつものことであつた。

忍び足で、桜田家から脱出する。

雛苺「ストロベリーチェンジ！」ピカピカピカーン！

莓仮面「亜空間移動！」シューーン！

スタッ！

莓仮面「こんばんわなの。ギンギン燈さん。」

ギンギン「これが最終試験であります。自分こそは怪人四天王が一人。機械怪人

ギンギン燈であります。」

莓仮面「試験？」

ギンギン「そうこれは試験であります。雛莓が生き残るためのお方の壮大な計画
であります。

それ以上聞きたいのなら自分を倒すことあります。」

ギンギン燈はそういつて自分の胸を指さす。

ギンギン「自分の弱点はここにあります。ここを狙わない限り自分は永遠に復活
するであります。」

莓仮面「どうということなの？ベリーベル。」

ベリーベル「今となってしまつては・・・この最終試験も意味がない
でしょうね。

貴方様の力は最早、規定以上になってしまいました。
しかしギンギン燈も軍人です。

誇りというものがあります。戦って敬意を示してください。」

莓仮面「うにゅ・・・？よく言ってることが分らないの。」

ベリーベル「ギンギン燈を倒しなさい。そうすればすべてを教えましょう。」

ギンギン「そういうことです！」

？「ちよーつと待ちなさい！」

闇から水銀燈が現れる。

水銀燈「気に入らないわぁ。この私を差し置いて勝手に話を進めないでくださるう？」

ベリーベル「なんという厄介な・・・。」

水銀燈「その人工精霊。貴方からジャンクしてやってもいいのよお？」

ベリーベル「ぴ、ぴえ！」ピュー！

ベリーベルは莓仮面の後ろに慌てて隠れる。

ギンギン「水銀燈・・・自分は。」

水銀燈「貴方ねえ・・・。私に黙ってこそこそしたら容赦しないと最初と言ったわよねえ？」

ギンギン「自分を破壊するのでありますか？」

水銀燈「ふん……。まあそれもいいけどね。知ってるでしょう？一緒にいたのだから今の私の状態ぐらい。」

勿論ギンギン燈は知っている。水銀燈がわざわざ自分で戦わずギンギン燈を使うのにわけがあった。

それは、水銀燈が自分の力で戦いすぎると、蒼星石のローザミステイカが反逆を起こし、力を制御できなくなるからであった。

いま彼女は平静を保っているが、それはめぐからもらった力のおかげであった。

もしもそれがなくなった場合には……。それは考えるまでもないことだった。

ギンギン「水銀燈の言うとおり自分はスパイであります……。

水銀燈にはいい迷惑だったでしょうが、自分には使命があります。自分はそれを全うするのみ。ただ……。貴方が自分を壊すというのなら自分はそれでもいい。」

水銀燈「何一丁前なこといつてるのお？貴方は本当に無能ねえ。ここは私に任せなさい。貴方には今まで世話になったし、私にだって恩返しするくらい

の器量はあるわあ。」

ギンギン「そ、それはしかし！」

無理だ。水銀燈の体は限界なのだ。任せるも何も水銀燈はもう戦えるような状態では

ない。だからこそ自分を今まで使っていたのではなかったか。

ギンギン燈は水銀燈の勝機を疑った。

それに水銀燈の性格上、恩義という言葉が出るのは疑わしい。

水銀燈「嘘よ。私にだって自分の状態くらいわかってるわあ。でもね。貴方が使えないと

なれば、どうしてもめぐにまた頼ざるを得なくなる。

そのことが何を意味するのか。貴方には分かっているわよねえ？

だから貴方にはいてもらわないと困るのよあ。

ここで破壊されるなんてもつての外よあ。

大丈夫よ。あんなちびっ子・すぐに終わるわあ。」

ギンギン「水銀燈は分かっております！ 苺仮面はもう貴方の手に負える相手ではない

のです！」

水銀燈「知ったことではないわあ。いいから貴方は後ろで見てなさあい！

聞いている通りよ！ 雛苺。貴方の相手はこの私。」

苺仮面「ヒ、ヒナは雛苺じゃないの！」

水銀燈「どうでもいいわよ。そんなこと。要するに貴方は私の敵。それだけの話よあ！

「バサッ！」

葛飯面「うっ、トウモエブレード、電光切り、ぴゃあー！」

葛飯面は水銀燈の動きを止めるべく光の剣閃を放つ。

水銀燈「なあにそれ？今さらそんな何度も見たような攻撃当たるとでも思ったわけえ？」

水銀燈は光の剣をなんなく避けて葛飯面に接近し、剣を振り落とす。

水銀燈の剣と葛飯面の竹刀との鏝迫り合いになる。やがて水銀燈は力づくで、横なぎ

にして、竹刀ごと葛飯面を吹き飛ばす。

水銀燈「つまない感じねえ。私をそのポンコツと一緒に見てると取り返しのつかないことになるわよお？」

そういつて体制を崩してる葛飯面にとどめの一撃を振り落とす。が例によって葛飯面は亜空間移動でよける。

水銀燈「消えた？」

ギンギン燈「亜空間移動であります！それがある限りこちらの攻撃は届かないのです！」

水銀燈「厄介ねえ・・・。」

ギンギン燈「後ろであります！」

水銀燈は振り返りもせず、剣を後ろに突っ立てたが、何の手ごたえもなかった。

水銀燈（まずいわねえ……。わざと油断を作って誘ったのに……。さすが相手も百戦

錬磨ね。自分の力の弱点もちゃんと把握しているわ。）

水銀燈「隠れてるだけじゃ戦いにならないわよお？」

莓仮面は亜空間の中で考えていた。なぜ自分は水銀燈と戦っているのだろうか。

莓仮面「ねえ。ベリーベル。」

ベリーベル「何を聞きたいか分かりますよ。その前に私からも一つ貴方様に聞きたいのですが。」

貴方様はローゼンメイデンのですか？それとも魔法少女莓仮面なのですか？

どちらなのです？」

莓仮面「え？急にそんなこと言われてもヒナ分らないの。」

ベリーベル「なら答えを出してください。別に両方とも貴方様自身なのですから、両方

のだといっても構わないのですよ。

ただ、貴方様は、同じローゼンメイデンである水銀燈の気持ちがお

分かりではない。

もしかしては貴方様は、ローゼンメイデンである自分を捨ててしまわれたのではないですか？」

葛仮面「か、考えたこともないの。そんなこと。」

ベリーベル「いいですか。貴方様は力を得ました。あるいは望めばアリスになれるかもしれません。

勿論貴方は形の上では敗退という形になっておりますが、その力を得た今貴方様

ならその状況を覆そうと思えばできるかもしれません。

アリスゲームについてはどう思っているのですか？

貴方様はみんなを守るために真紅の家来となりました。今の気持ちはどうなのですか？」

葛仮面「それは当然なの。ヒナはみんなを守るために真紅の家来になったの。」

ベリーベル「守るとは何を守るのですか？」

葛仮面「何を・・・？」

ベリーベル「器ですか？ドールの器？器さえ守り抜けばそれでいいのですか？」

葛仮面「ヒナ分らないの・・・。」

ベリーベル「分かりませんか・・・。なら水銀燈と全力で戦ってみ

なさい。」

苺仮面「・・・でもヒナは水銀燈も守りたいの。」

ベリーベル「思い上がらないでいただきたい！」

ベリーベルは強い口調で雛苺をたしなめた。

苺仮面「ぴえ！べ、ベリーベル？」

ベリーベル「水銀燈は第一ドール。貴方様は第六ドール。格が違うのですよ。」

水銀燈はローゼンメイデンとしての本質をよく分かっています。

ならば、本気でぶつかりなさい。それくらいでどうにかなるようなそんなやわなドールが貴方がたの一番上の姉なのですか？」

苺仮面「ベリーベル・・・分かったの。」

空間が避け苺仮面が再び水銀燈と対峙する。

水銀燈「来たわねえ。」

苺仮面「ねえ。水銀燈。ヒナにはよく分からないの。誰かを傷つけてそれで残った

ものがアリスになるって・・・。

みんなで一緒に笑っていることはできないの？」

水銀燈「・・・何を言うのかと思えば。なら貴方はお父様はどうするわけえ？」

苺仮面「お父様だってヒナ達と・・・」

水銀燈「私が望むのはお父様のみ、お父様が望むのはアリスのみ。後は皆いないのよ。」

貴方も他の姉妹も。そのための生贄にすぎないわあ。

それがローゼンメイデン。私たちという存在。」

苺仮面「で、でも・・・」

水銀燈「・・・私はお父様のためにこの身を捧げているのよ。みんな仲良く？

なんなのおそれは？

仲良くして・・・それでどうなるの？貴方のいつてることは、家畜の理屈よ。

後は真紅にでも聞いてみることね。最もここから生きて帰れたらの話だけどねえ・・・」

「

苺仮面「ヒナは・・・それでもヒナは！」

水銀燈「問答は終わりよ。私も貴方も戦うためにここにいるのではありません？」

それを聞いて苺仮面は黙りこむ。しばし見つめあう二人。

先に動いたのは苺仮面だった。というよりは、水銀燈が動くのを待っていたというほうが適切だったろう。

水銀燈にしても、力を使えるのはワンチャンスくらいしかない。

なら相手の攻撃した後の隙をつくしか方法はない。

莓仮面「水銀燈。ヒナは貴方を倒す。ヒナがヒナであり答えを知るためにも！」

亜空間フィールド展開！」グワグワグワ……。

辺り一帯に、莓仮面のフィールドが広がる。

水銀燈「な、なに？視界がぼやける。」

ギンギン燈「水銀燈！それにつかまったらおしまいです！」

水銀燈「くっ。」バサッ！

しかし水銀燈はすっ転ぶ。自分のいる位置がつかめていない。

莓仮面「亜空間無限分身！」ピカン！

水銀燈が、見上がると、そこには無数の莓仮面がいた。

水銀燈「ふっ……。」

それを見てなぜか笑みをこぼす水銀燈。

莓仮面「水銀燈……。」

水銀燈「仕方ないわね……。ここでやられるわけにもいかないわあ・
。。ぐ、ぐぐ。」

「

水銀燈の羽がどんどん大きくなる。

水銀燈「（蒼星石のローザミスティカが反発する・・・）ぐわあああ！」

あたり一面に黒い羽を飛ばす。翼は竜の形になり、水銀燈の背中を覆う。

2本・・・4本・・・6本・・・20本。

一斉に咆哮する水銀燈の背中の黒竜達。

ぐおー！

その振動で、力場が揺らぐ。

苺仮面「水銀燈の力がヒナの力場を相殺しようとしている？」

だがこれは持久戦。苺仮面の力は、光を取り入れることで発生している。苺仮面

自身の力を使っているわけではない。それでも体力は結構使うのだが・・・。

しかしそれに比べ水銀燈は・・・。

気炎を吐き、苺仮面に襲いかかってくる黒竜達。しかし苺仮面の分身達は、光の

エネルギーの塊であり、本体である苺仮面は絶えず、安全な場所へ座標移動している。

その風景を、ギンギン燈は冷静に見ていた。水銀燈が何を考えてい

るかはギンギン燈には
よく分かった。

ギンギン燈（チャンスは一度……。水銀燈が作ってくれるチャンス
をものにすれば……

。自分は水銀燈の覚悟にこたえるであります。
その結果、創造主の意向に逆らうことになったとしても！）

やがて、力尽きる水銀燈、羽は無残に折れている。

葛仮面「はあはあ……。水銀燈？」

葛仮面は水銀燈に近づき体を揺らす。

葛仮面「水銀燈……。どうしてここまでするの？」

その葛仮面の背後に、こっそりと近付いていくギンギン燈。

水銀燈「ひ、雛葛……」

葛仮面「水銀燈！気づいたの？」

水銀燈「私は……お父様を愛してるから……。だから……。よ。」

葛仮面「それはヒナだって……。でもヒナは姉妹たちもジュンも好き
なの。」

水銀燈「私……。でも、お父様が望んでいる……。から。私は……
私の愛している

……。姉妹達も……。自分も……。た……。ただめぐが……。」ボタン。

莓仮面「私の愛してる姉妹達・・・？もしかして水銀燈は・・・。」

シュツ。

音もなくアームを莓仮面の背中に突き立てるギンギン燈・・・。
しかし莓仮面は亜空間移動。

ギンギン「なぜ分かったのですか？」

ギンギン燈の後ろには莓仮面が竹刀を構えていた。やろうと思えばもう勝負はつく。

莓仮面「ヒナは・・・怪人さんの気配なら・・・ううん。どんな気配でも分かってしまうの。」

だからヒナにとって後ろは死角にならないの。」

ギンギン「自分たちの完敗であります。」

莓仮面「水銀燈が・・・。」

ザザッ。

ジュン「随分と衰弱してるな。放つといたら死ぬぞ。これは。」

ジュンは突然現れた。そして悠然としているが雛莓に気配も感じさせなかったというのはどういうことなのだろうか。

莓仮面「え？ ジュン？」

ジュン「話は後だ。 ベリーベル。 亜空間移動頼めるか？」

ベリーベル「・・・まあ構わないでしょう。 場所は貴方の地下室でいいですか？」

ジュン「頼む。 ギンギン燈もよくやってくれたな。」

ギンギン「しかし自分は・・・。」

ジュン「いやいいよ。 水銀燈お願いできるか？」

ギンギン「自分は任務を放棄・・・。」

ジュン「真面目だな。 さすが僕が作ったドールだ。 おいつ。 早くしろよ。 ベリーベル。」

ベリーベル「はあ・・・。 亜空間申請。」

？「申請を許可します。」

莓仮面「この声はやっぱり・・・。」

ジュン「後だ。 後々。 よしみんな。 いくぞ。」

第十一幕：真相解明

時空の裂け目を通して出てみるとそこは、何やらいろんな機械が置いてある研究室
のようなところだった。

雛苺「なんだか面白いの。変わったおもちゃいっぱいなの。」

ジュンは水銀燈に手を掲げると、見る見るうちに水銀燈の羽が元通りになっていく。

ジュン「後はカプセルの中に入れておけばそのうち目を覚ますだろう。」

ポチャン。

雛苺「ねーねー。ジュン。ここっていったいどこなの？」

雛苺は目を輝かせている。

ジュン「お前なー。もうちょっと驚けよ。能天気なやつだな。」

雛苺「ぶー！ヒナ能天気じゃないの！色々考えてるんだから！」

ギンギン「あの自分は・・・。」

ジュン「お前もカプセルの中に入ってる。疲れたろ？雛苺には僕からいろいろ説明しておくから。」

ギンギン「了解であります。」ポチャン。

雛莓「説明って?」

ジュン「どこから話すべきか……。最初から話すか。話はお前が真紅と戦って家来になった辺りから始まるんだ。」

雛莓「うい?」

ジュン「お前はまだ知らないだろうが、ローゼンメイデンが七体いることは知っているな。」

雛莓「うにゅ……。そういえばまだ七体目にはあったことないの。」

ジュン「七体目のドールの名を雪華綺晶という。お前は一度会ったことあるはずだぞ。」

雛莓「そんな覚えはないの。」

ジュン「だろうな。だが柏葉は覚えていた。」

雛莓「巴が?」

ジュン「そうだ。ここ一連の騒動は柏葉が行ったものだ。まあ僕ちよっと絡んでるかな。」

雛苺「巴が？どうして？」

ジュン「あのままいつていれば、お前は雪華綺晶に体に乗っ取られていたからだよ。」

そうさせないために柏葉は今回の作戦を企てたんだ。

僕も最初は半信半疑だった。でも柏葉は、その未来を変えるために僕に協力を要請したんだ。」

雛苺「うにゅー。つまりどういうことなの？」

ジュン「つまりお前を鍛えるためにみんなで頑張ったんだよ。」

雛苺「ありがとうなの。」

ジュン「いや……。まあどういたしまして。それでな。お前は柏葉と戦ってくれないか？

明後日の2時に。」

雛苺「なんでヒナが巴と戦うの？」

ジュン「だから鍛えるためだよ。分かったか？頼んだぞ。」

雛苺「うい。」

ジュン「おい。もうちょっとなんかあるだろ？いろいろ疑問がさ！例えばどうして

僕が車にはねられたのに平然としてるのとか。

ギンギン燈と僕との関係はどうなのとか。

なんかほら！もつといっぱいあるだろう？」

雛苺「でもねー。ジュン。」

ジュン「な、なんだ？」

雛苺「今夜なの。夜は眠りの時間なのよ。」

ジュン「本当にマイペースな奴だな……。そんなのだから食われるんだよ。」

雛苺「もう寝てもいい？」

ジュン「分かったよ。全く。でも今日はここで寝ろ。朝一番に説明したいからな。」

実は早く説明したくてうずうずしてたんだよ。ずっと。」

雛苺「じゃあおやすみなさいなのー。」ボタン。ぐーすかぴー。

ジュン「ちえ……。なんだよ。ちょっとくらい話を聞いてくれてもいいだろうに。」

まあいいや。僕も寝よう。」

しばらくして、水銀燈は目を覚ます。

水銀燈「随分と体が楽ね。ここはどこなの？」

隣を見るとギンギン燈が水銀燈と同じような容器に入っている。

水銀燈「羽も治ってるようだし、あそこに転がっているのは、真紅

のマスターと雛苺ね。

・・・これはあの人間が助けてくれたと見るのが妥当なようだけどなぜ私を？」

水銀燈は、ギンギン燈を容器から取り出し、ひたすらに往復びんたをする。

バシバシバシバシ！

ギンギン「あ、朝であります！」

水銀燈「朝じゃないわよ。全く貴方は無能ね。」

ギンギン「あれ？水銀燈。今は夜であります。」

水銀燈「見れば分かるわよ。」

水銀燈はいらいらした。今の状況がよく分かっていない。

水銀燈「これはどうなってるのぉ？」

ギンギン「率直にいうと自分はジュンに作ってもらったドールであります！」

役目は、水銀燈の保護！」

水銀燈「はあ？私の保護？意味が分からないわぁ。」

ギンギン「水銀燈の力の消耗を抑えるのが自分の役目でありました。それと雛苺をサ

ポートするのが自分の役目であります。」

水銀燈「にわかには信じがたいわあ。だってジュンとかいうのは真紅のマスターでしょ？ 雛苺のサポートってまあわかるけどね。むっ……。ちょっと待って。」

ギンギン「なんでしょう？」

水銀燈「つまり貴方のそのふざけた名前もこの人間が付けたってわけねえ？
なめたことしてくれるじゃないのぉ！」

ギンギン「や、やめてください。ジュンは自分にとって水銀燈のいうお父様と同じ存在
であります！」

水銀燈「ああ……。それであんなにも必死だったのね。」

ギンギン「それよりも水銀燈はなぜあそこまでやったのですか？
自分が必要なのは、水銀燈にとって必要だったのは水銀燈の力の消耗を抑えるためだった
はず、それなのに逆にあんなことをしたら本末転倒であります。」

水銀燈「貴方ね。 magari なりにも私とずっと一緒にいたのだから、少しは自分の頭で
考えたらどうなのぉ？」

ギンギン「考えても自分には分かりません！」

水銀燈「本当に貴方は無能ねえ。 分からないなら別にいいわ。 さて

ここにももう用はないし、私は行くとするわね。」バサッ。

ギンギン「あ、あの自分はどうしたらいいでありますか？」

水銀燈「貴方のお父様はその無様なおばかさんでしょ？・・・それとも私と一緒に来てくれるのぉ？」

ギンギン「自分は・・・。」

水銀燈「よしなさい。貴方は幸せ者ね。これから貴方がどうなるかわからないけど・・・

私のようににはなっちゃダメよ。

じゃあねえ。ばいばあい！」バサッ。

nのフィールドを通過して外に出る水銀燈。

水銀燈「また一人か・・・ふんっ。別にいいわあ。私に必要なのはお父様だけよお。」

ボオオオ・・・ジェットエンジンの音に水銀燈はにやりとするが、振り返らない。

ギンギン「自分は軍人です！上司である水銀燈についていくであります！」

水銀燈「私と一緒に行けば地獄行き確定よお。」

ギンギン「望むところあります！して次の任務は？」

水銀燈「そうねえ……。地獄への片道切符でも一緒に買いに行くってのはどお？」

ギンギン「それはいい考えであります！」

水銀燈「ふふつ……。本当に貴方は無能ねえ。そうね。まずはめぐの様子でも見に行きましょうか。」

夜空に消える二つの影。彼女ももう一人ではない。

翌朝。

そわそわ……。

ジュン「ああー。くそー。早く起きろよー！」

朝起きると、水銀燈とギンギン燈がいなくなっていた。大体予想していたことだからジュンにとってはどうでもよかった。

ジュン「こいつはいつまで寝てるんだよ。おい！雛苺！早く起きないとうにゅー禁止だぞー！」

雛苺「ぴゃー！」

雛苺は飛び上った。

雛苺「うにゅーほしいのー。」

ジュン「じゃあ僕の話聞いてくれ。」

雛苺「話聞いたらうにゅーくれるの?」

ジュン「そうだ。」

雛苺「うい!じゃあたくさん聞くの!」

ジュン「よし。まず僕が車にはねられた時があったな。」

雛苺「あときはびっくりしたの。」

ジュン「僕もびっくりしたよ。でもあれって僕のコピードールなんだよ。」

雛苺「うい?」

ジュン「僕はずっと地下にこもってたから、時々外に出たが、代わりに僕に

似せたロボットに生活させておいたってわけだ。

まあ・・・あの事件のせいで壊れてしまったがな。

あの時、これはまずいと思って柏葉に連絡してベリーベルに話を通してもらったんだ。

あの病院は、nのフィールド内にある仮想病院で実在していたものじゃないんだよ。」

雛苺「やっぱりジュンと巴は協力してたの?」

ジユン「いや……。正確には違うよ。一応敵対？になるのか。

僕は雛苺の未来と雪華綺晶に関する情報をもらって、柏葉が何かするからそれに対抗

する形にしてほしいといわれたんだ。

ギンギン燈は僕が作ったドールで、柏葉の動きから水銀燈を監視して守る目的で作ったんだ。

」

雛苺「本当なのベリーベル？」

ベリーベル「本当ですよ。雛苺様。私は巴の命令ですつと動いておりました。」

雛苺「正体がばれると記憶どうのというのは……。」

ベリーベル「勿論嘘でございますよ！ひょっひょっひょ！」

雛苺「ひどい！またヒナを騙したのね！」

ベリーベル「だから騙されるほうが悪いんじゃないですかあ？全く貴方と来たら

ホイホイと騙されすぎですよ。」

ジユン「まあそれでな。僕も雛苺がいなくなるのは嫌だ。だからいろいろとやってたんだが、

なんかのめり込んでいたらどんどん大掛りになってきて、自分のドールまで作って

しまったのだから驚きだったな。

僕って天才だったんだなと感じたよ。」

雛苺「そういえば、カナはなんでヒナのこと知ってたの？」

ベリーベル「それは私も興味深いですね。」

ジュン「ああ……。あのピチカートっていう人工精霊やけに頭がキレる奴で、僕らのこと

調べ上げてたんだ。

今も計画が潰されて激怒している雪華綺晶相手に、いろいろと策を巡らせて対抗してるよ。

はつきり言って金糸雀はお荷物だけだな。

勝手に通販で使えないものばかり注文して強奪していく。」

雛苺「もしかしてカナがいった悪い博士っていうのは……。」

ジュン「あいつそんなこといったのかよ。たぶん僕のことだろうな。

ともかく、ピチカートと僕は同盟関係だったというわけだ。」

雛苺「真紅達に教えなかったのは何でなの？」

ジュン「柏葉にそう言われたからだよ。」

雛苺「そういうのってあれよね。尻にしかれてる？」

ジュン「なんでだよ！」

雛苺「あつ。もう一つ。ローゼンメイデンに倒されると怪人さんが消えてたけどあれは？」

「

ジュン「ああ悪い。そこら辺僕にはよく分からないんだ。怪人からみには僕は一切関与してないからな。」

ベリーベル「そういえばギンギン燈は怪人だといってましたが？」

ジュン「ああ……。あいつはスパイだからな。お前が騙されてただけだよ。」

雛苺「やーい。ベリーベル騙されてるのー。」

ベリーベル「お黙りなさい。舌を引っこ抜きますよ。」

雛苺「びえ！」

ジュン「大体これで全部か？残りは柏葉に聞いてくれよ。僕は真紅達に今回のこと話してくるから。」

雛苺「うい……。真紅達怒らないかな？」

ジュン「大丈夫だろ。たぶん。怒られるとしたら僕だろうしな。気にするなよ。」

僕も好きでやったことだから。」

雛苺「待つてジュン！」

ジュン「なんだよ。気にするなつて。」

雛苺「うつん。違うのよ。」

ジュン「じゃあなんだ？」

雛苺「うにゅーちようだい！」

雛苺は満面の笑みを浮かべて、両手を差し出している。

ジュン「・・・そうだったな。ほらよ。」ポイツ。

パシッ。

雛苺「わーい！うにゅーだあー。ありがとうなのー！」

ジュン「お前は平和でいいな・・・。それじゃ今度こそ行ってくるよ。」

ウーン。ジュンはエレベーターで上に登って行った。

雛苺「おもしろーい！なあにこれ？」

ベリーベル「エレベーターですね。ボタン押してればそのうち扉が開きますよ。」

パカッ。

雛苺「すごいー。」

ベリーベル「早く入らないと閉じますよ・・・ああっ・・・！」

雛苺がエレベーターに挟まっていた。

雛苺「びえ〜ん……。エレベーターさんがヒナをいじめるのー！」

その声に反応したかのようにまた開くエレベーター。

雛苺「反省したのね！もう悪さしちゃめっよ。」

ベリーベル「なにがなにやら……。その1Fってボタン押せば上に行けますよ。」

ポチっ。ウィーン。ピンポーン。

雛苺「え？ここは？」

ベリーベル「海のと真ん中ですね……。マスターはここからどうやって帰ったのでしょうかね。」

雛苺「ベリーベルは知らないの？」

ベリーベル「一応私は巴側でしたので、全然知りません。ここに来たのも初めてですよ。」

雛苺「うーん……。そういえばカナにこんなものもらったの。」

雛苺は笛のようなものを取り出した。

ベリーベル「なんですか？それは。」

雛苺「これを吹くとね。動物さんが寄ってくるの。だから動物さんに助けてもらえるの！」

「

ベリーベル「亜空間移動したらいいじゃないですか。」

雛苺「それもそうなの。これは別の機会に使うのよ。」

ベリーベル「やっぱり金糸雀は役に立ちませんね。じゃあいきましようか。」

雛苺「うい。でも向かう場所は、ジュンの家じゃないのよ。」

ベリーベル「え？じゃあどこにいくのですか？もしかしてすぐに巴のところに？」

雛苺「ううん。違うの。話が途中だったから水銀燈のところに行くの。」

ベリーベル「それはどんなものでしょうね。まあ好きになさらないさい。」

雛苺「亜空間移動！」シーン！

第十二幕：決戦の決意

雛苺が礼拝堂に行ってみると、水銀燈がこちらに背を向け、祈りを捧げていた。

水銀燈「来たわね。」

水銀燈は背後にいる雛苺の気配を感じたらしい。振り返りもせず言葉をかけた。

雛苺「うん。」

水銀燈「少し待ってなさい。」

雛苺は水銀燈の姿を見た。祈っている水銀燈の後ろ姿は普段に似合わない神々しさがあるように感じた。

雛苺「・・・どんなお祈りしてるの？」

水銀燈「・・・私の天使のために祈ってるのよ。」

雛苺「天使？」

水銀燈「そう、逝かれたジャンクの天使。」

雛苺「ねえ、ヒナもその子のために祈っていい？」

水銀燈は無言になる。雛苺も無言で水銀燈の隣にいき祈りを捧げた。

それがしばらく続いた。水銀燈が横を見ると、雛苺が必死な顔で祈っている。

水銀燈「ふふつ。おばかさんねえ。雛苺。そんなに真面目な顔で・・・おかしいわあ。」

雛苺「えへへ・・・。そう？」

水銀燈「そうよ。大体何で何の関係もない貴方がそんなに頑張ってお祈りしてるのお？
全く祈ったところで何の意味もないわあ。」

雛苺「ヒナはめぐって人のことよく知らないけど、きっと水銀燈の大切な人なんだって
思ったの。だから・・。」

水銀燈「あれ？貴方にめぐのこと話した覚えはないけど・・・まあいいわあ。」

そう、貴方もめぐのために祈ってくれたのね。ありがとう。」

雛苺「ねえ、水銀燈。ヒナはやっぱりアリスゲーム以外にみんなが
幸せになる方法があると思うの。」

水銀燈「・・・探せば見つかるかもね。お父様も私たちもみんな
て笑い合えるような方法が。」

雛苺「なら水銀燈もヒナと一緒に・・。」

水銀燈「お断りよ。私たちはね。否定された存在なのよ。私は最初からずっと見てきたの。」

お父様が新しいドールを作り、そのたびに絶望の底に深みに陥っていく姿をね。

お父様は私たちを否定された。でも私たちもお父様を否定している存在なのよ。

それが私には耐えれないの。もし貴方のいう方法があつたとしても、私がそれを

選択してしまえば、お父様のすべてを否定してしまうことになるわあ。」

雛苺「う、うゆ・・・。」

水銀燈「貴方は第六ドール。そういうことは分からないかもしれない。い。」

そういう貴方こそできることもきつとあるのかもしれないわ。

でも私は付き合えない。他の姉妹もそうよ。やるのなら貴方一人でやることねえ。

それにアリスゲームで負けることは、それで終わるということではないのよ。」

雛苺「敗者は勝者の一部に、私たちは勝者と共に永遠に一緒にになれる・・・。」

水銀燈「それは貴方のいう幸せてことにはならないの？」

雛苺「でも、ヒナにはジュンが。水銀燈にはめぐがいるのよ。」

水銀燈「それもいつかは終わるわ。遅いか早いかの違いだけよ。はつきりいえば、貴方のその考え方はローゼンメイデンとお父様に對する敵対よ。」

私は考え直したほうがいいと思うわ。」

雛苺「水銀燈……。ヒナには水銀燈の言うこともよく分かるの。

でもやっぱりヒナはみんなが好き。みんなが違う風なことを考えてるとしても、

みんながヒナの考えていることを否定してもヒナは、諦めたくないの。

足掻いて足掻いて倒れるまでヒナは戦うのよ!」

水銀燈「……。驚いたわね。それもまたアリスゲームとでもいうのお?」

雛苺「うゆ?」

水銀燈「ふふつ。いけ好かないけちなウサギならそんなことを言うと思っただけよお。」

……。私はもう貴方を輕蔑することはないでしょう。

だからこそ次ぎあつた時は明確に敵として認識するわあ。

覺悟することね。」

雛苺「お、脅したってダメなの! あっそうそうあのね。水銀燈。第七ドールって知ってる?」

水銀燈「第七ドール? ええ。私も見たことはないけど。それがどうしたの?」

雛苺「実は・・・。」

雛苺は今回のことと第七ドールについて、知っている限りのことを水銀燈に話した。

水銀燈「そういうからくりだったのねえ。第七ドール。今もどこからか様子を窺ってるのかしらね？」

水銀燈は辺りを見渡した。

水銀燈「そんな気配はないけど・・・。」

雛苺「今はカナが抑えてくれてるのかも知れないの。」

水銀燈「金糸雀がね。ふんつ。とにかくこれで全てのドールがそろってるわけね。

ならばするべきことはただ一つね。」

雛苺「もしかして・・・。」

水銀燈「アリスゲームよ。特に私は翠星石とどうしても決着をつけないといけないわあ。

貴方にとってもこれは避けられない戦いのはずよ。場所は貴方の元マスターの家。いいわね？」

雛苺「分かったの。」

水銀燈「いいの？私は翠星石を壊すといってるのよ。」

雛苺「それは違うの。ヒナはみんなの心も守りたいから。
きつと水銀燈が今、望んでる戦いは壊す戦いじゃないの。これは水
銀燈に教えてもらった
ことなのよ。」

水銀燈「・・・ともかく頼んだわよ。じゃあ私は用があるから一足
先に行ってるわぁ。」
バサッ！

水銀燈は飛んでいった。雛苺もジュンの家を目指して礼拝堂を後に
した。

第十三幕：桜田家三ドールの誓い

水銀燈は飛んでいった。雛苺もジュンの家を目指して礼拝堂を後にした。

真紅「つまりジュン。貴方は私たちを騙していたとそういうことでもいいのよね？」

ジュン「そ、そうともいえるな。」

真紅「貴方は、雛苺をまるでおもちゃのように扱ったのよ。雛苺は優しい子だからなにもいかなかったかもしれないけど、貴方がしたことはそういうことだわ。」

翠星石「ちょっと真紅。そこまで大げさにいわなくても・・・。」

真紅「貴方は黙っててちょうだい。貴方はそこるところどう思っているの？」

雛苺を自分の手のひらの上で踊らせておいて、さぞかし満足だったでしょうけどね。」

ジュン「いや、そうじゃない。そうじゃないんだ。」

真紅「じゃあどういふことなの？」

ジュン「だからいったじゃないか。雛苺が雪華綺晶に食べられないための作戦だったんだよ。」

真紅「ええ。それは分ったわ。でも分かったからと言って納得のできるものでもないのよね。第一に私がいつてるのは雛苺の気持ちの話よ。

今の貴方の説明だと何の悪気も感じてないようだし、雛苺に謝ったりもしてないわよね。」

ジュン「いやだからな……。これは雛苺のためにやったことであつてだな。」

真紅「雛苺は、一人で怪人達を倒していたのよ。雛苺は争いを好む子ではないのに……。さぞ辛かったでしょうね。それを雛苺のためだからっていう理由だけで正当化できるものなのかしら？」

ジュン「分かったよ……。謝ればいいんだろ。うるさいな。いちいち。」

真紅「そう謝ればいいのよ。雛苺は誇り高きローゼンメイデンの第六ドールなのだから貴方が思つような子供じゃないのよ。」

ジュン「分かったよ。僕が悪かったよ。これでいいんだろ？」

翠星石「まあまあそういじけることはねえですよ。真紅だってチビチビのことを思えばこそその発言です。」

ジュン「分かってるよ。」

その時雛苺がちょうどよくジュンの部屋にはいつてきた。

雛苺「ただいまなのー。」

ジュン「ああ雛苺。ちょっといいたいことがあるのだが。」

雛苺「うゆ？後にしてほしいのよ。」

ジュン「いや今回のことお前を騙す形になってしまつてすまなかつた。

今回のことでお前には随分辛い思いをさせてしまつて本当に申し訳ない。」

雛苺「そんなことはどうでもいいの。それよりも真紅と翠星石に話があるのよ。」

雛苺は水銀燈とのことを二人に話した。

雛苺「だからね。巴の家でアリスゲームなの。」

真紅「そんな約束してしまったの？」

翠星石「・・・いやちょうどいいです。これで踏ん切りが付けれる。」

ジュン「水銀燈と決着をつけるつもりなのか？」

翠星石「そうです。あいつとの決着がつかない限り翠星石は前に進

めねえですよ。

真紅「悪いですけど水銀燈は譲ってもらいます。」

真紅「・・・分ったわ。雛苺は巴と決着をつけるのね？」

雛苺「う、うん・・・。」

真紅「明日の2時か。私はちょっと遅れるわ。」

ジュン「例のものを完成させるんだな。」

真紅「ええ。」

ジュン「なら僕はそれをサポートするだけだ。」

雛苺「例のものってなに？」

真紅「そのうち分かるわ。」

雛苺「気になるの。」

真紅「じゃあ私は作業に取り掛かるけどその前に一つ言っておくことがあるわ。」

翠星石「大体予想つくですがなんです？」

真紅「明日で、きっと何かが変わると思うわ。もしかしたら何も変わらないかもしれないけど、私たちのだれかが欠けることもありうるわね。」

翠星石「翠星石は水銀燈なんかに負けねーですう！」

真紅「そうね。でもあるいは私と翠星石が戦う可能性もある。」

翠星石「何を言ってるです？」

真紅「・・・明日はきっとそういう日になると思っね。望む望まないに関わらずにね。」

翠星石「真紅とですか・・・もし真紅と戦うことになるのなら翠星石は真紅に口

ーザミスティカを譲るです。」

真紅「それこそ何を言っているの？」

翠星石「もしくはチビチビみたいにしても構わねえですよ。でも今はそんなこと

考えねえです。

翠星石には水銀燈との決着以外今は・・・。」

真紅「・・・そうね。私が言いたかったのは、何か言いたいことがあるれば今のうちということよ。」

雛莓「ならヒナからいい？」

真紅「いいわよ。」

雛莓「ヒナは・・・水銀燈と話して考えてみたの。ヒナはみんなと一緒ににいたいけど、

みんなはアリスを目指してるのでしょ？

アリスは最後の一人にならないとなれないの。お父様がそう望んでいるから。

だからヒナはお父様と戦うことにしたのよ。」

真紅「な、なに・・・？なんですって？」

翠星石「・・・気は確かです？」

雛苺「それがヒナが行く道よ。」

真紅「でも具体的にはどうやって？」

雛苺「ヒナは、水銀燈と翠星石の戦いは邪魔したくはないの。それはきつと誇りをかけた

戦いだから。

ヒナは器だけじゃなくてみんなの心も守りたいと思うの。

お父様の心も、今はよく分からないけど、そうしていききたいと思うのよ。」

真紅「途方もないわね。でもきつと貴方ならできるわ。」

翠星石「その話、水銀燈との戦いが終わったらもう一度聞いてみたいです。」

ジュン「なんだか雛苺は随分と大人になったな・・・。寂しいものだ。」

翠星石「なにいつてやがるです！チビ人間！馬鹿馬鹿！馬鹿人間！」

ジュン「そんなに怒るなよ。僕が何したっていうんだ。」

真紅「全く貴方達は・・・、こんな時なのにいつも通りね。翠星石は何かないの？」

翠星石「翠星石は、みんなに感謝してるです。蒼星石があんなことになってしまつて

・・・でも真紅もチビチビもチビ人間もはぐれ者の翠星石にずいぶんよくしてくれたです。」

ジュン「・・・熱でもあるのか？」

真紅「茶化さないで聞いてなさい。」

翠星石「全くチビ人間は・・・でも本当に感謝してるです。特にチビ人間・・・いやジュンには。」

ジュン「おいみんな気をつけろ！明日は台風だぞ！」

雛苺「ジュン・・・ちゃんと聞かないとダメなのよ。」

真紅「貴方はどうしようもないダメ人間ね。ジュン。」

ジュン「ぐすん・・・。雛苺にまで怒られるなんて。」

翠星石「・・・全く調子の狂うやつです。もういいです。とにかくありがとうっていいかったです。」

雛苺「あーあ……。ジュン……。」

真紅「……。最低ね。ジュン。」

ジュン「おい。僕が悪いのか？待て待て、翠星石話はまだ終わっていないだろ。」

翠星石「はあ？お前がいちいち茶化すから話せねえです。」

ジュン「そういうな。続きは帰ってきてから聞いてやるからな。いか。必ず帰ってくるんだぞ。いいな？」

翠星石「ぷつ……。何だそんなこと気にしてたですか。当然です。絶対帰ってくるからまってやがれです！」

ジュン「よし約束だな。絶対守れよ？」

翠星石「あたりめーですよ。」

真紅「なんだ。それがやりたかっただけなのね。ジュンも素直じゃないわ。」

ジュン「そうだ。僕はこれでおしまいなんて嫌だからな。僕はきつとお前達がこなか
つたら、どうしようもない人間になってたと思う。」

翠星石「今だってそうじゃねえですか。」

真紅「こら。翠星石。」

ジュン「まあ・あまり否定はできないが、ともかくだな。絶対帰って来い。」

僕がいうことはそれだけだ。僕にはアリスとかどうとかなんて関係ないからな。」

真紅「貴方は気楽でいいわね。」

ジュン「うるさいな。お前は何かないのか？」

真紅「私？私はそうね。私はこうやって雛苺や翠星石、そしてジュンやのりと出会ったわけなんだけどね。」

私はこう思うわ。なんでもそうだけどきつと一瞬の輝きが重要なんだって。

どれだけ長い時間でもその一瞬の輝きには勝てないわ。

きっとその一瞬は誰の中でも思い出として永遠に生き続ける、人間も私たちもその一瞬のために生きているってそう思うのよ。」

ジュン「おいおい。僕の言うこと聞いてたか？別れのセリフみたいなこというなよな。」

真紅「別に別れだけがそうではないわ。出会いでも・・もっと別の何かでも。」

明日はきつとその一瞬が交差する日になると思うのよ。

何が起こるか私にも分からないし、きつと初めてね。全てのドールが同じ場所に集うのは。

もつとも七番目がくれただけだね。」

ジユン「結局お前はなにがしたいんだ？」

真紅「私たちはローゼンメイデン、気高くそして・・・。」

翠星石・雛莓「美しくあれ！」

真紅「そうよ。それが薔薇乙女。何か心に迷いが生じた時にはこの言葉を思い出して。」

翠星石「分かったです。最高の送り文句ですよ。真紅。」

雛莓「ヒナはヒナの戦いをするわ！」

ジユン「なんだかなー・・・。お前達姉ちゃんには、僕からいつておくからなにも言うなよ。じゃあいくぞ。真紅。」

真紅「ええ。」

ガチャ。ボタン。部屋を出る二人。

翠星石「チビチビ。ちょっと聞いてもらいたいことがあるです。」

雛莓「うゆ？」

翠星石「翠星石は明日刺し違えてでも水銀燈を倒すつもりです。ここに帰ろうとは思ってねえです。」

雛苺「そう・・・。」

翠星石「ジュンに言うのですか？そして止めてもらいます？。」

雛苺「うん。でも危なくなったらヒナが止めるの。」

翠星石「・・・余計なことです。翠星石はジュンが・・・好きですよ。でも翠星石に

とって蒼星石は、世界そのものです。

だから翠星石は水銀燈から蒼星石のローザミスティカを返してもらわねえといけねえです。」

雛苺「うん。」

翠星石「だからもし翠星石になにかあったときは、ジュンを頼むです。」

雛苺「分かったわ。」

翠星石「チビチビ・・・いやなんでもねえです。お互い明日は大切な日です。

悔いを残さないようにすべきです！」

雛苺「うい？」

翠星石「だから翠星石はこれからジュンのところに行ってくるです！チビチビもいくです？」

雛苺「勿論！ヒナも行くに決まってるの！」

翠星石「今日は翠星石も登ってやるですよ！」

雛苺「むっっ……。負けないのよ！翠星石！」

翠星石「望むところです！かかってきやがれです！」

第十四幕：アリスゲームへ

めぐの病室

めぐ「天使さんの嘘つき！裏切りもの！」

ガシャン！

めぐの投げる花瓶をかわしつつ水銀燈は答える。

水銀燈「私は私の意志で、貴方の命をどうするかは決めるわ。めぐの指図は受けないのよ。」

めぐ「だって約束したじゃない！」

水銀燈「・・・真に受けるほうが悪いのよ。そんなものは私の気分しだいであくまでも変更されるわあ。」

めぐ「もう貴方なんか天使じゃない！」

水銀燈「それはどうも。そのあだ名気に入らなかったのよ。・・・もう会うこともないでしょうね。」

ばいばい。めぐ。「バサッ。」

めぐ「待って！待って天使さん！」

ひらひら。

めぐ「なにこれは？めぐへ？天使さんの手紙？」

めぐへ

生きて。

めぐ「これだけしか書いてない。・・・無茶なこと言わないでよ。天使さん。」

ギンギン「あれでよろしかったのでありますか？」

水銀燈「ええ。私に何かあった時には任せたわよ。」

ギンギン「了解であります。」

水銀燈はめぐの病室のほうにそっと振り返る。窓にはめぐの顔が見えた。

起きて平気なのだろうか？と水銀燈は思った。

水銀燈「ごめんね。めぐ。でもきつと壊れたままでも戦うことはできるから・・・。

だから私は行くわ。貴方も・・・。」

水銀燈が振り返った。何やら口をパクパクさせている。めぐには何を言ってる

か聞こえなかったが、自然と言葉が漏れた。

めぐ「だって私には天使さんみたいに羽もないのに・・・。」

水銀燈「羽がなくても貴方は飛べるわ。言ったでしょう？死んでも一緒だって。」

貴方は私に対して言っただつもりだったんでしょうけど、私のほうもそうだったのよ。」

めぐ「そんな・・・最初から騙してたなんてずるいよ・・・。」

水銀燈「壊れた翼でも精一杯飛べばもしかしたら、空に届くかもしれない。」

めぐがいたから私はそう思えたのよ。

またすぐに会えるから・・・それまでさようなら。天使さん。」

めぐ「天使さん・・・。」

ギンギン「通じたんでしょうかね？」

水銀燈「さあね？じゃあ行きましょうか？地獄へね。」

ギンギン「任務了解であります。」

水銀燈「私はローゼンメイデン第一ドール水銀燈。・・・行くわ。」
バサッ！

二人は巴の家を目指す。

みつのマンション

金系雀「みつちゃん。明日でお別れになると思つかしら！」

みつ「アリスゲームってやつだったっけ？」

金系雀「そうかしら！だから今日はパーティをして盛り上げるかしら！」

みつ「みつちゃんカナがいなくなるなんてやだよー。」

みつは金系雀を抱き上げてほったすりすりをしている。

金糸雀「熱い熱い。みつちゃんあつかしら！」

みつ「でもカナにも夢があるものね！なら私はそれを応援するわ。」

二ヨキ。その様子を鏡から見ている雪華綺晶

雪華綺晶「ふふ……。夢？浅はかですね。黄薔薇のお姉さま。」

金糸雀「またでたかしら！全くこんなときくらい放つといしてほしいものかしら！」

大体みつちゃんを暗に馬鹿にしてないかしら？」

みつ「その子いつも鏡からでてこないのね。」

金糸雀「チキンかしら。そろそろかかってきたらいいかしら！チキンチキンの雪華綺晶

！」

みつ「ほら。カナ、チキンよ。」ドテツ！

金糸雀「やったー！チキンかしら！いったただっきまーす！」

雪華綺晶「じー。。。」

金糸雀「何見てるかしら？うらやましいかしら？」

雪華綺晶「うらやましいです。」

みつ「それにしてもこの子はどうして鏡から出てこないのかな？もしでてきたら・・・

ああしてこうして・・・むっふー!」ボタン。

金糸雀「ああっ! みっちゃん!」

雪華綺晶「おぞましいこと・・・。金糸雀明日決着をつけさせてもらいますよ。」

金糸雀「ん? もういくかしら?」一緒にパーティに参加してもいいかしら。

まあ雪華綺晶は見てるだけになってしまっけど。」

雪華綺晶「それはうれしいです。」

金糸雀「特別に許可するかしら。呉越同舟というやつかしら。カナってなんて頭がいいのかしら!」

公園にて。

莓仮面「十・萌・斬! ぴゃー!」ペシン!

凶暴な怪人「ぐおー。貴様ー!」ドカーン!

コロコロ。後には人形が残る。

よろよろ。

ベリーベル「どうしました?」

莓仮面「うい……。ちょっと眠くって。」

ベリーベル「そうですか……。変身状態でそれとはとうとう終わりも近いみたいですね。」

本当にぎりぎり間に合ってよかった。」

莓仮面「明日ね。」

ベリーベル「ええ……。しかし果たして意味があったことだったのでしょうかね。」

どの道、貴方様は動かなくなる運命にあるのですから、巴がやったことはある意味何の意味のなかったのかもしれませんが。」

莓仮面「そんなことないの。ヒナは本当なら真紅との戦いの時で、終わっているはずだったから

これまで戦うことができてうれしいの。」

ベリーベルにも巴にも感謝してるの。」

ベリーベル「戦うことがローゼンメイデンの宿命とはいえ、貴方様には荷が大きすぎましたね。」

莓仮面「うい……。でもヒナでもみんなを守ることくらいはできるから。」

それにね。ヒナは動かなくなる寸前まで戦うつもりなの。少しでも戦える余力があるのなら

ヒナはそれに賭けてみたい。」

それによって築ける未来があるかもしれないから、どれだけ望みが薄くてもそのため

なら姉妹とでもヒナは戦うの。

それがもしかしたらヒナにとってのアリスゲームなのかもねなの。」

ベリーベル「ならば私の話も聞いていただけますか？」

莓仮面「うい？なーに？」

ベリーベル「私は貴方様にアリスになってほしかった。でも今となつてはアリスになるとかそうでないだとかはどうでもよくなりました。

私は貴方様についていきましよう。私の主は最早ローゼンではなく

雛苺・貴方様なのです。

それが私の決意、受け取ってもらえますか？」

莓仮面「変身解除。」シューン・・・。

雛苺「いいのよ。では薔薇の契約をしましよう。」

ベリーベル「光栄の至りでございます。私、ローゼンメイデン第六ドール雛苺の人工精霊ベリーベルは主を雛苺と定めます。」

雛苺「ローゼンメイデン第六ドールの雛苺が命じます。人工精霊のベリーベルはこの薔薇の契約以降は雛苺を主と仰ぎなさい。」

ベリーベル「かしこまりました。」

雛苺「でもね。ベリーベルはヒナのお友達なの。それとヒナが動かなくなつた場合は真紅をお願いね

。」

ベリーベル「仰せのままに、では改めてよろしくお願いします。明日・・・の結果によつてはすぐお別れかもしれませんが。」

雛苺「そうね。明日・・・ね。きっと大丈夫なの。」

ベリーベルは「大丈夫」というのがどういう意味なのか分かりかねたが、あえてなにも問わなかった。

ベリーベル「そうですね。明日です。もうそろそろ9時になりますから今日は帰りましょう。」

雛苺「はいなの！」

そんな感じで、それぞれのドールはそれぞれの思惑を持ち、明日を迎えた。

第十五幕：決闘

ジュン「お前、なにやってるんだ？」

金糸雀「ああん！もう！ノリが悪いかしら！そら、みんなでここにいる雪華綺晶をフルぼっこにしてやるかしら！」

雪華綺晶「え？なぜですか？それは約束が違う。」

翠星石「お前が雪華綺晶とやらですか。随分となめたことしてくれ
たみてえですね。」

雛苺「ヒナを食べちゃうつもりなのよー！」

雪華綺晶「これは分が悪いです。本当に私をフルぼっこになさるお
つもりなのですか？
お姉さま方。」

翠星石「お前なんかにかまってる場合じゃないですう。お前はせい
ぜい金糸雀と遊んで
やがれです。」

雪華綺晶「黒薔薇のお姉さまならこの先にいますよ。」

翠星石「ならそこをどきやがれです。すつとこどつこい！そらどい
たどいた！」

ペシペシッ！

雪華綺晶「あう．．。」

金糸雀「なにをするかしらー！カナたちを無視するんじゃないかしら！」

ジュン「罷り通る！押し通る」ドカツ！

雛莓「ごめんね。カナ。」

後には二人が残された。

金糸雀「．．．。」

雪華綺晶「．．．。」

金糸雀「さあ！アリスゲームの始まりかしら！」

雪華綺晶「．．．。」

金糸雀「始まりかしら！」

雪華綺晶「帰って寝ます。」

金糸雀「そうね。それがいいかしら。」

一行が次の間に向かってみると想像通り．．いや少し違ったか。

ギンギン「ようやくきたわねえ。」

翠星石「水銀燈！本体できやがれです！この場に及んでそんな人形
なんかに頼るんじゃ
ねえですよ！」

ギンギン「あら？それはお互い様じゃないのお？貴方だって無様な
抜け殻の人形を
大事そうに持つてるじゃなあい。」

翠星石「な、なにいいやがるです！」

ジュン「よせ。翠星石。挑発だ。」

翠星石「チビ人間。悪いですが、相手はマスターなしです。席を外
してくれねえです？」

「

ジュン「水銀燈はマスターなしでも強いだろ。」

翠星石「何言ってるですか。水銀燈の事情ならお前のほうが詳しい
はずですよ？」

ジュン「だからってなあ・・・。」

翠星石「チビチビ。巴はきっとこの奥にいます。チビ人間をさっ
さと連れて行けです
。」

雛母「翠星石。すぐ戻ってくるからね。」

翠星石「翠星石だってそう簡単にはやられねえですよ。そんなこと

より自分の心配を
するです。」

雛莓「ジュン。行くのよ。」

ジュン「うーん……。分かったよ。」

タッタッタ。

ギンギン「唯一の勝機を逃すなんて貴方もつくづくおばかさねえ。
」

翠星石「何も言うことはねえです。語るのなら戦いで。」

ギンギン「言うようになったわねえ。」

翠星石「蒼星石！」

ニヨキ。

蒼星石「水銀燈。この日が来るのを待っていたよ。」

ギンギン「レンピカ！」

レンピカ「ぴー。」

蒼星石「何をするつもりだい？」

レンピカから庭師の鉢がでてきた。

その銕をギンギン燈は蒼星石のほうに向かって投げる。

パシッ。

蒼星石「？」

ギンギン「そんなレプリカの銕じゃまともに戦えないでしょう？」

蒼星石「余裕だね。水銀燈。その余裕が命取りになるよ。」

ジュン「一番奥にいるなんて、魔王気取りか？柏葉。」

巴「よくここまできたね。雛莓。」

ジュン「また無視かよ！いい加減にしろ！」

雛莓「ジュン。悪いけど少し黙っててほしいの。」

ジュン「おいー！僕がいる意味ないじゃないか！」

巴「雛莓。何か私に聞くことはないの？」

雛莓「うっん。いいのよ。始めましょうか？」

巴「ええ。これが最後よ。」

雛苺・巴「ストロベリーチェンジ！」ピカピカピカーン

苺仮面「・・・。」

巴「・・・。」

苺仮面「巴。一つだけ聞いていい？」

巴「なにか？」

苺仮面「どうして巴は変身したのに変なお面つけてないの？」

巴「かつこ悪いからよ。」

苺仮面「じゃあどうしてヒナは・・・。」

巴「ベリーベルの趣味ね。」

苺仮面「・・・。」

ジュン「がははは。おい！柏葉！その年になって魔法少女ごっこか？笑えるなー！」

苺仮面「もうこんなお面いらないの！」ポイツ！

雛苺「さあいくのよ！トウモエブレード！」キラッ

巴「トウモエブレード・・・。」キラッ

ジュン「おいー！とことん無視かよー！あはははー！」

雛苺「電光切り、ぴゃー！」シュインシュイン！

巴「はっ！」シュインシュイン！

相殺するがやはりというかなんというか、巴の放つ剣閃のほうが勝る。

その余波がジユンを襲った。

ジユン「おい！ふざけるな！僕は無関係だぞ！」

ジユンは拘束された。

ジユン「お前！初めから僕を狙うつもりだったな？どいつつもりだ。」

巴「さあどうする？雛苺。」

雛苺「こうなったら本気なの！トウモエブレード亜空間モード！」

巴「申請を許可しません。」

雛苺「え？」

ベリーベル「無理ですよ。雛苺様。亜空間の力は元々巴の力です。そしてここは

巴の空間、亜空間を使うのは実質不可能となりました。」

雛苺「な、ならこの技で片をつけてやるの！十！萌！・・・」

巴「無駄よ！十萌斬！」スパン！

雛苺「うきゃー！」ドカーン！

巴「雛苺は遅いよ。それじゃ雪華綺晶を倒すことなんて無理ね。」

雛苺「ああっ！ヒナのトウモエブレードが壊れちゃったの！」

巴「このままでは雛苺は、確実に体に乗っ取られる。私にはそれが見えるの。」

雛苺は雪華綺晶には渡さない。

渡すくらいなら私が・・・貴方を壊す！」

ジュン「く、狂ってる！」

雛苺「ヒ、ヒナはあきらめないの！」

ベリーベル「雛苺様……。しかしこれはもう詰みですよ。ここは私が何とかしますから

雛苺様は下がっていてください。」

雛苺「いやよ！」

ベリーベル「・・・本当に強くなりました。でも武器もないのにどうやって？」

雛苺「苺わだち！」ニヨロニヨロ！

巴「なにそれは？」スパン！

雛母「ああっ！」

巴「もう終わり？」

雛母「ま、まだまだなの！」

ベリーベル「・・・。」

第十六幕：七は一、一は七、そして終幕へ

その頃ギンギン燈と蒼星石の戦いは熾烈を極めていた。

翠星石「水銀燈。そろそろ遊びは終わりにしねえです?」

ギンギン「何を言っているのぉ?」

翠星石「本体で来るです。それとも怖くて翠星石の前に姿を見せられねえですか?」

柱の影からのっそりと出てくる水銀燈。

水銀燈「……。」

翠星石「少し待ってるです。」

水銀燈「ええ。」

翠星石は蒼星石を壁に掛けた。

翠星石「蒼星石。そこで見てるです。翠星石はお前の心も連れて水銀燈と戦うです。」

蒼星石「……。」

翠星石「……蒼星石。」

バツ。翠星石は水銀燈と対峙する。

水銀燈「もういいの？」

翠星石「ええ。待たせちゃったですね。」

ボタン！

水銀燈「ん？」

翠星石「誰です？」

真紅「私よ。」

水銀燈「あら誰かと思えば、おばさんの真紅じゃない。」

真紅「私が決闘の立会人になるわ。」

水銀燈「そんなこといつて翠星石が不利になったら助けるつもりでしょう？」

その手は食わないわ。」

真紅「私はこの戦いを神聖なものとみなすわ。だから手出しはしない。」

水銀燈「どうだか・・・と言ってるけど翠星石？」

翠星石「好きにするですよ。真紅。でも手出しは無用です。」

真紅「ええ。」

水銀燈「ふん。翠星石の次は貴方よ。真紅。5。貴方はもう行きなさい。」

ギンギン「詳細を教えてください。」

水銀燈「邪魔よ。私は今から本気を出すわ。めぐのこと頼むわね。」

ギンギン「了解であります。」ボオォー！

水銀燈「翠星石。こちらの事情は知ってるでしょうから、悪いけど最初から本気でいくわよあ。」

翠星石「翠星石も出し惜しみはしねえです。」

水銀燈「せいぜいマスターを殺さないようにするのね。」

翠星石「……………」

水銀燈「なに？」

翠星石「条件は五分です。」

水銀燈「貴方まさか？どうしてそこまで？」

翠星石「翠星石にとってそれだけの価値がこの戦いにはあるです！」

水銀燈「…分かったわ。どっちにしろ私は全力で答えるまで！」

とはいえ正気の沙汰ではなかった。翠星石は水銀燈と違ってマスタ

ーがいなければほとんど力を
使えないはずなのだ。

勝敗は火を見るより明らかであるであろっが・・・。

翠星石「スイドリーム！」

翠星石は如雨露を呼び出した。

翠星石「水銀燈。翠星石も超ド級のフルパワーでいくですよ！覚悟
するです！」

水銀燈「貴方の本気なんてたかが知れてるわぁ。いいからやってみ
なさいよ。」

翠星石「言っただすね！後悔しやがれです！生物流転・森羅万象・
。。」

真紅「翠星石・・・」

翠星石「守神よ！」

翠星石の下にある地面から巨大な巨木が次々を出てきて翠星石を覆
った。

やがてそれらは一つの巨人を作り出す。

真紅「守神の森人^{もっぴん}。」

水銀燈「死ぬ気なの？翠星石。」

真紅「どうするの？水銀燈。放つといっても翠星石はそのうち力尽きるわよ。」

水銀燈「ふつ。誰に物を言ってるの？私はローゼンメイデン第一ドルの水銀燈よ！」

水銀燈の背中から黒竜が暴れたす。

それはどんどん増えていき無数に増えるかと思いきや、やがてそれは八本に収束されていく。

巨大な八体の巨竜。

水銀燈「はあ・・・はあ・・・ヤマタノオロチ。」

水銀燈の中にある蒼星石のローザミスティカが暴走していない。この戦いを見届けているということだろう。

真紅「邪神と守神、火と木なら翠星石には分が悪いわね・・・。」

森人がオロチに襲いかかる。森人が進む道には、生命が生まれる。

オロチは火を噴き、森人を燃やす、燃やしつくされる生命。

森人は燃えながらも再生を繰り返し、燃えている手でオロチを振り払う。

オロチの首が一つもげたが、構わず火を吹き続けるオロチ。

真紅「あ、熱いわね。とんだ怪獣決戦になったわ。翠星石のほうは体が覆われてる

からいいでしょうけど、水銀燈は背中以外生身。さすがの水銀燈もこの熱さには・・・。」

二人の戦いは、地下室をさんざんにぶち壊して、進行し、天井には穴があき、

色々な機械をダメにしていた。

非常なる迷惑であった。

そして、力尽きたのか、元の姿に戻る二人。

翠星石「もう終わりです?。」

水銀燈「ふふつ・・・。ええ。どうやらそうみたいね。」

翠星石「案外水銀燈も大したことないです。」

水銀燈「・・・翠星石。もうお互い細かいことはできないでしょう。私はこの剣をまっすぐ貴方に突き刺すわ。それで終わりよ。」

翠星石「・・・翠星石が避けたらどうするです?。」

水銀燈「そしたら貴方の勝ちね。」

翠星石「まっすぐ突くのなら金糸雀にだって避けれるですよ。」

水銀燈「そうね。なら避ければいいわ。・・・行くわよお!。」

タツタツタ。よろけながら剣を構え翠星石のほうに突撃する水銀燈。

その時、翠星石には蒼星石の声が聞こえた。

蒼星石（翠星石。）

翠星石（どうしたんです？蒼星石。もうじき敵を討つことができるです。）

蒼星石（無用だよ。翠星石。憎しみで戦うアリスゲームをしてはいけない。

水銀燈の心を受け止めてあげてほしい。）

翠星石（どういうことですか？）

蒼星石（僕たちは元は一つなんだよ。だから水銀燈は翠星石で翠星石は水銀燈なんだ。

自分を拒絶しないで。僕ならいつだって君とともにいるから。）

翠星石（でも水銀燈には蒼星石のローザミスティカが入ってるですよ。）

蒼星石（本当に大切なのはローザミスティカじゃないよ。翠星石。君なら本当はもう

とっくに分かっているはずだよ。

自分に素直になって目を開けば、きっと見えてくるはず。見えてい

るだろう？

翠星石。）

翠星石（・・・見えてるですよ。分かったです。翠星石は水銀燈の

心を受け止めて
やるです。」

蒼星石（ありがとう。翠星石。ローゼンメイデンの誇り高き第三ド
ール。僕達は今こそ
一つになった。）

グサツ。

水銀燈「・・・おばかさん。どうして避けないのぉ？」

翠星石「ふふつ。・・・申し訳ねえですが立ってるのもやっとなった・
ですよ。

・・・でも心配いらねえ・・・です。

水銀燈にお土産をやるです・・・から。」

水銀燈「それは楽しみ・・・（グサツ！）ねえ・・・。」

翠星石の体から一本の木が出てきて水銀燈の体を貫く。

水銀燈「な、なかなか粋なお土産ね・・・。」

翠星石「蒼星石のローザミスティカを返す・・・です。」

水銀燈「こ、これよ。」ポワツ。

翠星石「し、真紅。」

真紅「なに？」

翠星石「蒼星石のローザミステイカは・・・チビチビに渡すです。

翠星石はちよつと休んでからいくですよ・・・な、なに本当にちよつと休めばなんてこと

もねえ・・・ですから。

ジュンとも約束したです・・・必ず帰るって・・・」

真紅「分かったわ。」

水銀燈「さすがね・・・翠星石。わ、私はもうダメみたいよ。真紅。受け取ってくれるわね？」ポワッ。

真紅「光荣よ。」

水銀燈「あ、ありがとう。お父様とアリスゲームを・・・」カクン。

真紅「分かってるわ。水銀燈。私の最も近くて最も遠かったお姉さん。気高く誇り高いローゼンメイデン第一ドール。」

翠星石「さあ・・・チビチビが・・・待ってるです。」

真紅「ええ。」

真紅は翠星石を背中に背負うと次の間に進んだ。

第十七幕：信じるということ

翠星石「わ、私のことはいいですけどに・・・。」

真紅（水銀燈・・・後で迎えに行くわ。）

だんだんと次の間が見えてきた。

ジュン「遅いぞ！真紅。・・・翠星石！」

真紅「今はそつとしておいてあげて。よく眠ってるわ。」

ジュン「そうか。」

真紅「苦戦してるわね。雛苺・・・あれは雛苺でいいのよね。」

ジュン「そうなんだよ。真紅。持ってきたか？あれ。」

真紅「ええ。もちろん。雛苺！」

雛苺「う、うゆ？」ふらふら。

パシッ！

雛苺「これは？」

真紅「それは新しいトウモロコシブレードよ！名づけて「紅」！その武器なら巴の空間に
対抗できるわ！」

巴「すごいね。亜空間理論を自力で組み立てることができるなんて」

真紅「薔薇乙女とその下僕の知識をなめないでほしいわね。さあ！雛苺！」

ジューン「誰が下僕だよ！」

雛苺「トウモエブレード」紅「、亜空間モード！」

真紅「申請を許可するわ。」

雛苺の体が輝いていく。

巴「亜空間ね。でも私もできることよ。」

巴の作りだす亜空間と雛苺の作り出す亜空間とがせめぎ合う。

雛苺「むう・・・。」

巴「どうやらお互いフィールドは使えないようね。」

雛苺「ならこれでいくの！十・萌・弾！ぴゃあー！」ドヒューン！

光速のタックルと巴は同じく光速移動をして避ける。

巴「雛苺にできることは私にもできるのよ。・・・ところで雛苺が一番聞きたいことは、怪人達のことよね？」

ぴくんと雛苺が反応した。

ジュン「そうだ！どういことなんだ？本当にローゼンメイデンに倒された怪人達は人形に戻れなくなるのか？」

巴「それは本当よ。全ては雛苺を成長させるために仕方のない犠牲だったの。」

ジュン「うおおー！初めて無視されなかったぞー！」

真紅「・・・ジュン。少し落ち着きなさい。」

雛苺「そんな・・・嘘でしょ。巴。だってヒナだって人形なのよ。」

巴「私にとっては雛苺は人間と変わらないよ。それは桜田君だってそうなんじゃない？意志を持たない喋れない人形なんて私にとってもものでしかないよ。」

雛苺「そんなことないの！人形にだって意志はあるの！」

巴「私に分からなければそれも無意味ね。」

雛苺「嘘よ！巴はそんな子じゃないの！」

巴「私は雛苺さえ無事ならどうでもいいのよ。他の人形なんて知らない。」

雛苺「巴・・・いくら巴でもそれは許さないの！」

巴「元より許してもらおうなんて思っていないのよ。気に入らないならその気持ちを私にぶつけることね。」

雛莓「ヒナは怒ったの!」

ジュン「おおー! 雛莓の怒るところなんて初めて見たぞ。レアものだ。」

雛莓と巴は高速戦闘を繰り返す。お互いに撃ち合い、残り段数も少なくなってくる。

巴「後何発撃てるかしらね? 下手な鉄砲数うてば当たるといっけんど...」

どの道お互い一発当たったらおしまいね。」

雛莓「はあ...はあ...」

光の力を受けていても、動かしているのは自分の体である。つまりは限界があった。

ここはnのフィールドに近い巴のフィールドであり、巴のほうが体力的に有利で、十萌弾を撃てる数はおそらく巴のほうが多い。

光速の戦闘を繰り返す中、突如雛莓に話しかけるものがある。

雛莓「...レンピカ?」

蒼星石（僕だよ。雛苺。）

雛苺（蒼星石なの？）

蒼星石（そう、君は怒りにとらわれている。それでは本当の所は見えないよ。）

雛苺（だって巴が！）

蒼星石（目で見たもの、耳で聞いたものに惑わされていたら、本当の姿は見えてこない。

君になら分かるはず、巴さんの本当の心が、見た目ではなくその奥に潜む心を感じとるんだ。

心優しい君にはそれが可能なはずだよ。）

雛苺（奥に潜む心……。巴の本当の姿？）

蒼星石（見た目に惑わされるのならいつそ目を閉じてしまってもいい。

怒りは自分を見失ってしまうんだ。慈愛の心で相手の心を撃つんだよ。

僕も手を貸すから。）

雛苺（ありがとう。蒼星石。ヒナやってみるのよ。）

蒼星石のローザミスティカが雛苺に宿る。そして雛苺の動きが止まった。

巴（棒立ち？いいだね。体力が尽きたのか……。）

巴はそれめがけて、光速の十萌弾を繰り出す。

雛母「見えた・・・これが巴の心・・・！」シュン！

雛母には、巴の動き、心、感情を読み取ることができた。

巴の攻撃を最小の動きでよける雛母。

真紅「あれは！」

ジュン「どうしたんだ？真紅。」

真紅「蒼星石の動きだわ！」

戦いは、その者の心を強く示す。その戦いの流れに身を投じれば、その者の心の在り様すら己と同化することができる。

雛母は無駄のない動きで巴を追い詰める。最早巴が放つ十萌弾も何の意味もなさない。

巴は、身長之差と技之差には自分のほうに理があると考えていたが、雛母の動きは技だとか早さだとか、そういうことでは説明できないまるで吸い寄せられるようなそんな動きだった。

やがて雛母の竹刀が巴の動きをとらえた。

巴（ダメだ・・・これは私が対応できる動きじゃない。）

パシッ！

巴は雛苺に竹刀を払われる。

巴「どうしたの？私が憎いのでしょうか？私を打って。」

雛苺「・・・もう打ってるの。巴の心は今ヒナが打った。」

巴「・・・私の負けね。」

雛苺は真紅のほうを向いた。

雛苺「ヒナは確かに最初はベリーベルに騙されて、巴やジュンの手のひらの上で踊っていたけど、たしかもしれないの。」

真紅「雛苺？貴方まさかあの時の会話を聞いてたの？」

雛苺「でも、これはヒナ自身の戦い。ヒナは雪華綺晶と決着を・・・アリスゲームにも決着をつけるのよ。」

真紅「・・・いいでしょう。」

雛苺「明日また会おうね。ヒナは今日は巴の家に泊まるから。」

真紅「ええ。また明日、会いましょう。」

ジュン「じゃあな。柏葉。」

雛苺「行く。巴。」

巴「・・・いいの？」

雛苺「うん。一緒にうにゅー食べよ。巴。」

巴「ありがとう。雛苺。」

雛苺は、巴に特に何かを聞くということをしなかった。巴も雛苺に特に何かを言うことはしなかった。

最早事実がどうであるなどといった問題ではなかった。

雛苺はただ巴を信じたというそれだけのことであった。

巴「雛苺はもう、一人で戦えるね。」

雛苺「ヒナは甘えんぼだからそれは無理なの。でも大丈夫。ヒナは一人ぼっちじゃないから。」

ヒナのここにみんながいるからヒナは戦えるんだと思うの。」

雛苺は目を閉じて自分の胸を押さえた。

巴「・・・ごめんね。雛苺。」

雛苺「ううん。ありがとう。巴。ヒナは巴が大好きなの。」

巴「私もよ。雛尊。」

これで一連の騒動はすべて終わった。

いや、本来のローゼンメイデン達に課せられている定めはまだ終わっていないかった。

第十八幕：気高き戦い

ジュン「おい……。約束が違うだろ。」

翠星石「。。。。。」

真紅「正確にいえば・・・約束は守ったわね。家に帰ってきたんだし。」

ジュン「お前はなんでそんなに冷静なんだ？」

真紅「翠星石は立派に戦ったわ。」

ジュン「立派に戦うことがそんなにもえらいことなのか？翠星石から話の続き聞いてないんだぞ。」

真紅「ならあの時ちゃんと聞いてあげればよかったのよ。」

ジュン「馬鹿言うなよ。帰ってから話すって約束だったはずだ。こいつは約束を破ったんだ！」

真紅「いやまだよ。まだローザミスティカは機能してるわ。時間の問題でしょうけどね。。。。。」

ジュン「話すことはできないのか？」

真紅「私に聞いてどうするの？」

ジュン「おい、性悪人形！起きろよ！」

ジュンはグラグラ翠星石を揺らした。

ジュン「くそっ……。大体僕はそういうことをいってるんじゃないんだ。お前ら勝手じゃないか。

勝手に押しかけてきて勝手に出ていくなんて。」

真紅「・・・そうね。」

ジュン「・・・まさかお前までいなくなるってことはないよな？」

真紅「少し私は席を外すわ。貴方はその間頭を冷やしなさい。」

ジュン「頭を冷やせだって？第一お前は翠星石がこんな状態なのに放つとくのか？」

真紅「・・・。」

ジュン「おい、待てよ！」

ガチャン。

ジュン「なんなんだよ……。頭を冷やせていったって……。こいつは約束破りやがって。最後まで自分勝手なやつだったな。」

翠星石「何を言いたい放題いつてるですか！このお婆か！」

ジュン「げ？なんだ？」

翠星石「翠星石はお前や蒼星石の無理難題をこなすのに必死だったですよ！」

そこを評価してもいいんじゃないんです？」

ジュン「翠星石・・・のローザミスティカ・・・なのか？」

翠星石「翠星石はですね。蒼星石の無茶な注文のせいで水銀燈の攻撃を受ける羽目にな

って、もうそこで楽になりたかったのにお前が無茶な約束するものですから、

ここまで踏ん張ってきたですよ！」

ジュン「翠星石・・・もう元には戻れないのか？」

翠星石「戻るわけねーですう！」

ジュン「そうなのか・・・。」

翠星石「相変わらずお前はうだつのあがらねえしけたやつです。」

ジュン「な、なんだと？僕はお前のために悲しんでやってるのに！」

翠星石「頼んだ覚えはねえです。うじうじとしたあげく真紅にまで八つ当たりしてる

とは本当にダメなチビ人間ですう。」

ジュン「そんなこといわれたって・・・」

翠星石「あんまし時間ねえですから手短にいくですよ。まっともかくお前と出会えて

翠星石はそこそこ楽しかったです。

翠星石のローザミスティカは雛苺に渡すですよ。」

ジュン「おい。それだけか？もっとなにかないのか？」

翠星石「・・・あるですがそれはお前がこれから先ずつと考えてみるです。」

そしたら翠星石のこと忘れられなくなるですから、ざまあみろです。

「

ジュン「手の込んだ真似をするやつだな。そんなことしなくてもお前のことを忘れてりなんかするものか。」

ローザミスティカは真紅に渡さないでいいのか？」

翠星石「ええ。翠星石はチビチビに賭けてみたいです。じゃあお前も元気でやるですよ

。」

ジュン「お別れか・・・。翠星石。」

翠星石「お前にはお前の世界があるです。お前はそれがつまらねえって思つかもしれねえです。

なら自分で面白くしてみることですよ。命さえ度外視すれば案外それも簡単なことです。」

ジュン「そうかな・・・」

翠星石「そうです。まあお前はラッキーでした。翠星石のような立派なドールと一緒に

暮らすことができたですから。

さて・・・そろそろ時間です。」

ジュン「翠星石・・・」

翠星石「おっとじめじめは禁止ですよ。笑って別れようじゃねえですか。

今までありがとう。ジュン。きっとまたいつか会えるですよ。」

ジュン「ありがとう。翠星石。僕も僕自身と戦ってみせるよ。」

ジュンは笑った。きっと翠星石も笑っているのだろう。

やがて真紅が戻ってきた。

ジュン「真紅！」

真紅「いい顔ね。どうやら私が何かを言う必要はなさそうね。」

ジュン「だが僕は最後まで見届けるぞ。」

真紅「それでこそ私のマスターよ。フィナーレは近いわ・・・最後の戦い私は参加できないから雛苺は頼んだわよ。」

ジュン「やっぱりお前はそういうつもりだったのか。」

真紅「うすうす気づいてた様ね。」

ジュン「ああ・・翠星石のローザミスティカだ。雛苺に渡してほしいそうだ。」

ピカッ。

真紅「確かに受け取ったわ。ジュン。さようならは無用よね?」

ジュン「分かってる。なんたって僕はお前の下僕なんだからな。」

真紅「それは違うわ。」

ジュン「え?」

真紅「貴方は私の誇り高き偉大なマスターよ。」

ジュン「・・・。」

真紅「じゃあいつてくるわね。」

ジュン「ああ。」

真紅はnのフィールドに向かった。金糸雀もおそらく来てる頃だろう。

金糸雀「遅かったかしら。真紅。」

真紅「お待たせしたわね。雛苺は？」

雛苺「ここなの。」

雛苺は金糸雀の影に隠れていたようだ。

真紅「これは翠星石のローザミスティカよ。彼女は貴方に意志を託したわ。」

雛苺「す、翠星石が？」

雛苺は信じられないという顔をした。

真紅「どうしたの？そんなに驚いて。翠星石は貴方ならきつとみんなが一緒になれる
日常を守ることができると思ったのよ。」

ふわっ。

雛苺は翠星石のローザミスティカを飲み込んだ。

真紅「さてと・・・本題ね。」

金糸雀「今日は何のようであつたかしら？」

真紅「言わないでも分かるでしょうけど、残りのローゼンメイデンはあと四体。

私たちとここにいない雪華綺晶ね。」

金糸雀「いない・・・とまでは言い切れないかしら。たぶんどこかで

見てるかしら。

（大体どの辺にいるか。他のドールには分からないでしょうけどカナには何となく分かるし。）「

雛苺「きつとヒナ達を食べようとしてるのよ！」

金糸雀「あの子も話してみたらそこまで悪い子でもなかったかしら。」

真紅「ここまできたら無駄に言葉を飾る必要もないわね。私は雛苺に自分のローザミステイカを託すわ。」

金糸雀「・・・。」

雛苺「びえ！何を言い出すの？」

真紅「ねえ。雛苺。どうして私が貴方を家来にしたと思う？」

雛苺「え？それはでも真紅には自分のやり方があるからだって・・・それにヒナのことをかわいそうに思ったのよ。」

真紅「貴方の知る真紅は、ただかわいそうなんて理由で貴方を助けたりするかしらね？」

雛苺「でもでも真紅は優しいから・・・。」

真紅「私が貴方を生かした目的は、貴方ならアリスゲームの答えを

見つけ出せるかもしれないと思っただからよ。」

雛苺「そんな……。ヒナはそんなのは。」

真紅「分からないの？いえ……。私にもおぼろげながら見えるだけでよくは分からないわ。

でもそろそろ終わりが見えてきている。

だから私は貴方に託すことを答えをして決めたのよ。

金糸雀はどう思うの？」

金糸雀「同意見かしら。カナも元々アリスになることを目標としていたかしら。

でも今のヒナにならカナの意志も託せる確信があるかしら。

ならカナは形を見てみたい。私たちが追いつけてきたものの形を。ヒナはそれを体現できるだけの意志の強さを持つてるかしら。」

雛苺「そんなこと言われてもヒナ困るの……。だって……。」

？「正気の沙汰ではございませんね。御自分がアリスになることを放棄されるなど……

それはお父様に対する冒とくでございますよ。」

金糸雀「でたかしら。」

真紅「雪華綺晶ね。」

ニユーン……。

雪華綺晶「人を化け物みたいにするのはよしてください。」

金糸雀「おとなしく待つてゐる約束だったかしら。」

雪華綺晶「あまりにお姉さま方は愚かなので見るに見かねましたね。よりによつてそのできそこないに全てを託す？冗談ではございませんことよ。」

真紅「できそこない？聞きずてならないわね。」

雛苺「雪華綺晶……。貴方が全ての原因ね。」

雪華綺晶「らしいですね。貴方は……。雛苺。本来私の器になるべき存在です」

つまり……。できそこないということですよ。大体貴方はすでに戦いをやめています。」

雛苺「ヒナはまだ戦っているの！」

雪華綺晶「しかし少なくともアリスゲームに参加する資格はもうありません。」

貴方の言う戦いというのは、貴方個人の戦いではないのですか？」

雛苺「ヒナはみんなを守るために戦うのよ！」

雪華綺晶「守るべき相手からローザミスティカを差し出されそうになつてゐる貴方がどの口でそれを言うのですか？」

真紅「黙るのよ。雪華綺晶。私たちは絆という思いでつながつてゐるわ。器をもたない」

貴方には分からないことでしょうけどね。」

雪華綺晶「愚かしいこと。自分がアリスになれば私たちに価値などないですよ。」

「

金系雀「・・・雪華綺晶。貴方は焦ってるかしら。」

雪華綺晶「私が焦ってる？」

金系雀「そうかしら。自分の存在が否定されそうでは本当は怖がっているのかしら。」

雪華綺晶「私が怖がってる・・・？そうですか。あるいは・・・。」

金系雀「だから待ってるかしら。ヒナは必ず貴方にも答えを出してくれるはずかしら。」

「

雪華綺晶「・・・分かりました。ならば私は貴方がたの愚かな行為にも目を瞑りますわ。」

桃薔薇もお姉さま。できそこないの貴方が私にどのような問いかけをなさるつもりなのか

分かりませんが、楽しみに待っていますから私を退屈させないでくださいね。」

ニユーン・・・雪華綺晶はゆっくりと消えていった。

真紅「案外素直ね。」

金糸雀「根は単純な奴かしら。ヒナはアリスゲームに対する答えはもう決まってるかしら
？ヒナはアリスになるつもりはあるのかしら？」

雛苺「ないのよ。」

真紅「ない？」

雛苺「ないの。」

真紅「じゃあどうするの？」

雛苺「ヒナがローザミスティカを全部集めたらお父様に会うことができるの。」

そこでお話するのよ。」

金糸雀「それでどうするかしら？」

雛苺「みんなを元に戻してもらうの。」

真紅「それは無理だわ。お父様がお許しになるはずがない。」

雛苺「それでも戻してもらうの。ヒナはみんなと一緒にいたいから。」

金糸雀「カナは・・・正直ヒナの考えにすべては賛成はできない。
だからここでヒナと
決着をつけてもいいかしら。」

雛苺「カナ・・・ヒナは。」

金糸雀「それは分かってるかしら。それはカナもおんなじ。だからヒナがなんといおうが
どうでもいいかしら。」

カナはヒナに任せた。細かいことはなんでもいいかしら。カナはヒナについてくことに
決めたかしら。」

雛苺「カナ。それなら何もローザミステイカを渡さなくたって。」

金糸雀「それがカナの戦いかしら。カナがそうと決めた以上これはカナにとってアリ
スゲーム。つまり誇りをかけた戦いかしら。」

つまりカナは、ヒナとは戦わない限りにヒナに託すことにしたかしら。

それがカナの戦い。」

雛苺「分かったの。金糸雀。ヒナを選んでくれてありがとう。」

金糸雀「・・・本当に強くなったかしら。昔はもつと泣き虫だったのにね。」

雛苺「みんなの・・・もちろんカナも・・・のおかげよ。」

真紅「そこまで分かっているのなら、貴方は大切なものが見えて
いるはず、私にも

おぼろげながら見えつつも今だ見えないアリスゲームの本質、私は貴方にローザミス
ティカを託す、おそらくそれが私にとって次なるステップへと導いてくれるはずだわ。

だからこれも私の戦い。真紅にとってのアリスゲーム。」

雛苺「分かったわ。真紅。でもちょっと待ったほしいのよ。」

真紅「ここまできてなにかしら?」

雛苺「ヒナはもうほとんど体が動かないの。」

金糸雀「え?何言ってるのかしら?」

雛苺「变身すれば何とか動けるけどね。だからヒナは真紅にすべて託そうとしてたの。」

真紅「……もちろん承知の上だわ。」

金糸雀「え?」

雛苺「そう……真紅ならヒナの状態くらい分かってるものね。」

真紅「ええ。でもローゼンメイデンにとって器が動くかどうかというのはほとんど問題にならないわ。

貴方のみんなを思う心、目的をなそうとする意志の強さ、それこそがローゼンメイデンの真の力の源なのよ。

私の心は変わらない。例えば貴方がもうほとんど動けないとしても私は貴方にすべてを託すわ。

金糸雀はどうするの?」

金糸雀「み、見そこないでほしいかしら!カナだってそのくらいでびびるわけないかしら!」

雛苺「無理してるように見えるの。」

金糸雀「なにをいつてるかしら！なんならルンルスリップしてもいいくらいかしら！

カナはびびってなんかないかしら！」

真紅「ふふっ。」

雛苺「ふふ・・面白いのね。カナ。」

金糸雀「何を笑ってるかしら・・！でもなにか・・ふふっなんだか面白いかしら。変ね？

どうしてこんなに面白いのかしら？」

真紅「変な話ね。もしかしたら気分が高揚してるせいかもしれないわ。」

雛苺「ヒナは一人じゃなにもできなかったの。でもみんながいたからヒナでも戦えるようになったの

。みんなが一緒ならヒナはきっとできるのよ。」

真紅「そうよ。その絆こそ私たちの力。ならば今こそ、元の一つに

」

金糸雀「カナたちはいつでも一緒かしら。だから困った時にはいつでも呼んでくれて

構わないかしら。」

雛苺の手の上に自らの手を重ねる真紅と金糸雀。三人の体が光り一つとなる。

雛莓「真紅・・。力ナ・・。」
┘

第十九幕：賢者と愚者

ニユーン・・・。

雪華綺晶「茶番は終わりましたか？」

雛苺「これは誇り高き薔薇乙女の戦いよ。茶番じゃないの。」

雪華綺晶「それが戦い？ただ逃げただけにはしか見えませんことよ。
桃薔薇のお姉さま

。」

雛苺「それを認めようとしない貴方こそが逃げてるのよ。雪華綺晶。

」

雪華綺晶「いつてくれますね。ならば決着をつけますか？今ここで。

」

雛苺「いやそれは待ってほしいの。」

雪華綺晶「まだ何か茶番を続けないといけないのですか？どこまでも面倒な方です。」

雛苺「帰ってうにゅーを食べるの。雪華綺晶もおいで。」

雪華綺晶「私が貴方と？構いませんがうにゅーってなんですか？」

雛苺「丸くてふわふわしてるのよ。」

雪華綺晶「でも私は器持っていないので、このフィールドから出れません。」

そついつて雪華綺晶はちらりと転がっている真紅と金糸雀の人形を見た。

雛苺「めっ！ダメなのよ！」

雪華綺晶「ふふっ……。いいでしょう？それくらい。それはもう物ですよ。」

雛苺「違うの。雪華綺晶は違うのよ。思いが宿っていればそんなもんなものだつて

物だなんていえないの。だからうにゅーはここに持つてくるから我慢して。

ねっ？」

雪華綺晶「そういうのならここは妥協しますわ。ただしもし持つてこなかった場合は分かつてますね？」

雛苺「だ、大丈夫！忘れてたりなんかしないから！」

雪華綺晶「頼みましたよ……。愛しいお姉さま。」

ニユーン……。

雛苺「消えた……。そつだ。真紅と金糸雀。」

雛苺はふらふらしつつ、うんしょうんしょうんいいながら、二人の体を

もってnのフィールドを出た。

ジュン「ああっ……。やっぱりこうなったのか。」

ジュンが想像していた通りの結果になったが、やはり悲しいものは悲しいようだった。

雛苺「ねー。ジュン。うにゅーほしいの。」

ジュン「お前な……。大丈夫なのか？本当に。」

雛苺「雪華綺晶と一緒に食べるの。できたら紅茶も。」

ジュン「おい！ふざけるなよ！そいつは敵だぞ！」

雛苺「び、びえ……。怒らないでほしいの。」

ジュンは言いすぎたかと思って反省した。

ジュン「全く仕方ないな。雛苺は。残りドールももうお前とそいつだけなんだろう？」

「

雛苺「うん。でもヒナは雪華綺晶のこと全然知らないから、少しお話したいと思って。」

ジュン「まあいいか。お前の意志ってことは、お前に宿るドールズ全員の意志ってことなんだろう。たぶんな。

じゃあ用意するからまってるよ。……ところでお前体おかしくな

いか？

変に動きが鈍いが、ローザミステイカの影響なのか？」

雛苺「な、なんでもないの。ジュンありがとー。ジュン大好きー！」

ぎこちなくはしゃぎまわる雛苺を尻目にジュンは部屋を出て下に降りていった。

雛苺「あつ！ヒナも行くのー。」

鏡があるのが下の部屋なのだから、雛苺もいつまでもジュンの部屋にいたって仕方がなかった。

そうして雛苺たちはnのフィールドへと向かった。

雪華綺晶「マスターも一緒ですか。」

ジュン「悪いのか？」

雪華綺晶「いいえ。むしろ歓迎しますわ。」

ジュン「・・・寄るな。不気味なやつだな。」

雛苺「ジュン・・・めっなのよ。女の子にそんなこといっちゃめっ！なの。」

ジュン「でもこいつ見た目がやばいぞ？」

雛苺「はい。雪華綺晶。これがうにゅーよ。こっちが紅茶。」

雪華綺晶「うにゅーとは食べ物のことでしたか。」

もぐもぐ。

雛苺「どう？おいしい？」

雪華綺晶「さあ？」

雛苺「さあっておいしくないの？」

雪華綺晶「あまり楽しくはありませんね。」

雛苺「うにゅ・・・？楽しいっておいしいかどうかを聞いているのよ。」

雪華綺晶「物を食べるというのは初めて行ったことですよ。」

雛苺「そなの？じゃあ紅茶もいかが？」

雪華綺晶「いただきますわ。」

ぐくぐく。

雛苺「どう？」

雪華綺晶「少し楽しいです。」

雛苺「うにゅー・・・。少しですかー。」

雛苺「ああそっか。他に食べ物食べたことないならおいしいかどうかどう

か分からないものね。
」

雪華綺晶「そういうことですかね。」

雛苺「でも食事は雰囲気を楽しむものだからね！」

雪華綺晶「そんなものですかね。」

ジユン「その割にはがつがつ食べてるだけにしかみえないがな。」

雛苺「ぶー。ちゃんと楽しみながら食べてるのよ。」

雪華綺晶「ではそろそろいいですか？」

雛苺「なにかあるの？」

雪華綺晶「アリスゲームですよ。」

雛苺「ああ・・・そういえばそんなこともあったの。」

ジユン「忘れてたのかよ・・・もうだめだこりゃ。」

雛苺「ね。ヒナは雪華綺晶のことをもっと知りたいの。だからもう少しお話したい。

ダメ？」

雪華綺晶「・・・それはうれしいです。何しろ私はずっと一人でし
たから。

お姉さま方の楽しそうな様子を見て羨んでました。」

雛苺「どうして雪華綺晶には器がないの？」

雪華綺晶「それは肉のしがらみがアリスになる妨げとなるからです。その最も好例が

貴方であり、黒薔薇のお姉さますらそれから自由にはなれませんでした。

アリスとは絶対的存在です。ですからあらゆる相対的観念から離れた精神体が

アリスの触媒になるにふさわしいとお父様はお考えになったのです。

「

雛苺「ねえ、ジュン。今の話分かった？」

ジュン「いいや。全然。」

雪華綺晶「・・・つまり貴方は器をもっているからみんなを守ろうとか思いつてこと

ですよ。それはアリスになるということにとっては不純なことです。

「

雛苺「何かアリスってあんましょくないのね。」

雪華綺晶「なにをいうのですか。私には正直不思議でなりません。どうしてお姉さま方が

貴方の中で反発を起こさないのかが。

むしろのお姉さま方は貴方の中で安心していらっしゃるような気配すらあります。

なぜ私ではなく貴方をお姉さま方はお選びになったのですか？

それともお姉さまがはみんな墮落してしまったとそういうことなの

ですか？

少なくとも黒薔薇のお姉さまだけは反発なさると思っていましたの
に・・・。」

雛苺「ヒナもね。最初はアリスになりたいって思ってたのよ。ヒナ
だってお父様に
会いたいもの。」

ねえ、雪華綺晶はアリスになることについて悩んだことってある？」

雪華綺晶「ありません。迷いを挟むこと自体がすでにアリスから遠
のいているのです。」

雛苺「でも水銀燈だってすごく悩んだの。他のみんなだって・・・
。」

多分お父様だってそうだと思うの。ずっとずっとアリスが誕生しな
くって落ち込んで

悩んで、ヒナ達がこうやってアリスゲームをしている間にも姿を隠
して泣いているのよ
。」

雪華綺晶「だからこそ私たちができることは、アリスになるという
ことではないですか？」

「

雛苺「そういうのもあると思う。でもヒナは悩んでもいいと思うの。
ただ・・・悩んだとき

に手を差し伸べてくれる人がいたらきつと幸せなんだと思うの。
悩みを解決するのは自分でしかできないけど、心を重ねることは誰
にだってできるの。」

雪華綺晶「つまりこういいたいのですか？貴方は不遜にもお父様に心を重ねよう？」

雛苺「ヒナだけじゃないの。みんなそうなのよ。」

雪華綺晶「戯言・・・と一蹴するのは簡単ですが、どうも私たちは水と油みたいですね。

でもなんでしょう。貴方と話をするのは少し楽しい。」

ジュン「なんだか僕がいないが如くのセリフだよな。」

雛苺「ヒナは貴方も守りたいの。貴方の心も。」

雪華綺晶「・・・部分が集まっても全体にはなりません。心臓、肝臓などを集めても人間にはなりません。

あるショックがあつて初めて全体という個体が生まれるのです。

部分をいくら磨き上げても決して全体には届かないのです。

そしてそのショックこそアリスゲーム。

貴方がやってきたことは、部分を磨いているに等しいことです。

私たちはアリスになるための存在。そうでなければ価値などないのです。」

雛苺「うい。よく分かるけど、それでもヒナはみんなが好きなの。だからみんなを守る

ことが私にとってのアリスゲーム。」

第二十幕：終わりの始まり

雪華綺晶「貴方のことはよく分かりました・・・。
改めて自己紹介しましょう。

私はローゼンメイデンの第七ドール、雪華綺晶。アリスゲームを完成させるものです。」

雛莓「私はローゼンメイデンの第六ドール、雛莓。アリスゲームに抗うものなの。」

雪華綺晶「もう語ることがないのなら、始めましょう。そしてこれで終わりです。

お互いの存在をかけた最後のアリスゲームを。」

雛莓「これが始まりよ。雪華綺晶。ここからすべてが始まるの。」

ジュン「ついにきたか。頑張れよ・・・雛莓。」

雛莓「ホーリエーメイメイ！」

雛莓は右手に真紅のステッキ、左手に水銀燈の剣を呼び出し、六体のドールズの人工精

霊と共に雪華綺晶に襲いかかった。

雛莓の重かった体が羽のように軽くなる。力がみなぎってくる。みんなが力を貸してくれている

雛莓はそう思った。

それらをあしらっている雪華綺晶の顔がどこか悲しげなのを雛莓は

不思議に思った。

雪華綺晶「お得意の変身はなさらないのですか？」

雛苺「うい？」

雪華綺晶「ふふっ……。分かりませんか？私の気持ちだ。」

そういつて雪華綺晶が、戦闘を再開させる。雛苺は、考えてみた。雪華綺晶の気持ちを。

雛苺（蒼星石は言ってたの。本当の気持ちを見ないといけないってヒナにならそれができると

。雪華綺晶はヒナの妹なの。

ヒナはみんなにいつぱい守ってもらった。だから今度はヒナが雪華綺晶を……。）

雛苺が戦いの中で雪華綺晶のことを考えた。雪華綺晶の表情、動き、攻撃を交えるたびに心を重ねる二体のドール。

おそらく……。雪華綺晶も迷っているのだろう。考えてみれば雪華綺晶は雛苺よりさらに幼いはずであった。

かつての雛苺と同じようにどんなことをしても、お父様に会いたいという気持ちがあるに違いなかった。

それでも、寂しいから本当は姉妹やマスターと関わりたいと思っているのだろう。

だから器を乗っ取るなんて言う手段に出ようとしたのだ。

雛苺も全く同じような気持ちを抱いている。だから水と油などではない。

ただ雪華綺晶は表現することが苦手なだけで、雛苺と雪華綺晶は全く同質だったのだ。

見つめあうドールは、真っ白になり、自分と相手の境目がどこなのかすら分からなくなっていく。

そういう中で雛苺は、確かな雪華綺晶のそしてアリスゲームの本質を掴めた気がした。

雛苺（翠星石、蒼星石、力を貸して！）

雛苺「スイドリーム！レンピカ！」

雛苺は、心に意識を集中する。雪華綺晶の心の木が見えてくる。

雛苺（あれが雪華綺晶の心の木なの・・・？木自体がないなんて・・・）

雪華綺晶「どうしました？さあ至福の時を再開いたしましょう！」

雪華綺晶はさらに茨を増やし雛苺に飛ばす、それを防御する人工精霊達。

雛苺は茨にさえぎられて近づくことすらままならない。

雛苺（もう体が……。でもきつと一度だけなら大丈夫。それで決めるのよ！）

雛苺「ジュン。今までありがとうなの。」

ジュン「おい！どうするんだあれ。」

雛苺「ヒナ達がきつと雪華綺晶を守るのよ。だからジュン。ヒナに力を貸して。」

ジュン「あ、ああ……。」（ヒナ達？雛苺の中にいるドールズのことか。）信じてるぞ。雛苺。」

雛苺「ありがとう。」

雛苺（みんな……。ヒナはみんなを守る！）

雛苺「いくのよ！雪華綺晶。」

雪華綺晶「どうぞ。御存分に。」

雛苺の背中から漆黒の翼と紅の翼が生える。

雛苺「ピチカート！」

ピチカートはその声に応え、雛苺はバイオリンを手にする。

雪華綺晶（決めるつもりですね。しかしそううまくいきません。）

雪華綺晶の白い茨が雛苺めがけて襲いかかってくる。

雛苺「破壊のシンフォニー！」

雛苺の漆黒の翼が発火し風にまきつかせ、炎の竜巻を発生させそれを維持したまま雪華綺晶に向かって飛翔する。

茨はどんどん燃えていく。

それを見た雪華綺晶は、茨で自分の体を守ろうとするが、雪華綺晶の周りを囲うようにして赤い薔薇が茨をさえぎる。

雪華綺晶「これは赤薔薇のお姉さま？桃薔薇のお姉さまはすべてのドールと同調している……。
まさかそんなことが……。」

雛苺（見えない……。雪華綺晶の心の木が……。どこにあるの？）

蒼星石（雛苺。探そうと思ってはいけない。自分が心の木そのものになるんだよ。

君なら庭師の缺を正しく扱える。君だからこそだ。だから諦めないで！）

翠星石（お前なら対になっている庭師の道具を両方扱えるだけの心の力があるです。

後は自分を信じるだけですよ。）

雛苺（分かったの。ありがとう。ヒナは信じる。雪華綺晶のこともみんなのことも、自分自身も！）

もやもや。

雛苺（見えた！今度こそ決めるのよ！）

雛苺「スイドリーム！レンピカ！」

雛苺は翼を解除しバイオリンを外して、庭師の如雨露、庭師の鋏を手を持つ。

雪華綺晶「な、なにをなさるおつもりです？」

雪華綺晶は本能的におびえる。雛苺にここで攻撃されたら何か大事なものが失ってしまうようなそういう感覚を味わった。

雪華綺晶「ひい！あっちにいつてください！」

雪華綺晶の体から最後の抵抗の茨が飛んでくる。雛苺は攻撃をよけようとしたが、足がふらふらでよけきれない。

それでも雛苺は雪華綺晶に向かって走る。

ベリーベル「ひよひよ。私めを忘れてもらっては困りますなあ！なあに！私でも弾よけくらいにはなりますよ。

雛苺様・・・お世話になりました。」

ベリーベルは激しく光り雪華綺晶の攻撃を無効化させていく。そうしてベリーベルは消えていった。

雛苺（ベリーベル・・・。ヒナ泣かないのよ。ありがとう。ベリーベル。これで決めるの！）

雛苺は、雪華綺晶の器の中心めがけて、庭師の鋏で心の木の成長を邪魔している白い茨を断ち切り、庭師の如雨露で心の木に養分を与える。

木は見る見るうちに大きくなっていき、雪華綺晶の攻撃は止まった。

雪華綺晶「……。」

雛苺「雪華綺晶？」

雪華綺晶「お姉さま。桃薔薇のお姉さま。私に答えを聞かせてください。」

雪華綺晶は何やら複雑な表情で雛苺のほうを見ている。

雛苺「大丈夫なの。心配しないで雪華綺晶。ヒナは雪華綺晶のお姉さんのよ。」

雪華綺晶「お姉さん……。」

雛苺「そうなの。雪華綺晶はみんなの妹なの。だからもつと甘えていいの。」

だから……ストロベリーチェンジ！」ピカピカピカーン！

苺仮面「さあみんな！ヒナに力に貸して！トゥモエブレード！ヒナヒナモード！」キラッ！

ヒナヒナモードとは、雛苺の意志力を具現化させるトゥモエブレードの最終形態である。

雛苺の意志の力がドールズを具現化させていく。

水銀燈「雛苺。私たちに私たちの示す未来を見せなさい。」

金糸雀「ヒナー頑張るかーしらー！」

翠星石「チビチビ！お前はやれるやつです！翠星石が言うんだから間違いねえです！」

蒼星石「雛苺。忘れないで。慈愛の心、そして君は一人じゃないつてことを。」

真紅「私たちの思いのすべてを貴方に託すわ。そして貴方の思いを七番目

（そしてお父様）に・・・届かせるのだわ！」

苺仮面「受け取って！雪華綺晶！私の・・・いやローゼンメイデンの思いを！」

雪華綺晶「ふふっ・・・。」

雪華綺晶は微笑む。

苺仮面が、竹刀を上に掲げた。それにならいドールズは円陣を組み各自それぞれの武器を上に掲げ雛苺の持つ竹刀に掲げた。

ドールズ「十・萌・・・。」

武器が重なった点から何色とも言えない暖かい光が満ちて来る。

ドールズ「愛！」

光は全てを包み世界を包む。あるいは宇宙までもを。

雪華綺晶もその光に包まれていく。

雪華綺晶「ああ・・・っ。光が満ちて・・・。私が・・・私が溶けていく・・・。」

憎しみが廻るアリスゲーム。その連鎖が今断ち切られました・・・。
ありがとうございます。
ます。

桃薔薇のお姉さま。

第二十一幕：光を纏った愚者のおはなし

後には何も残らなかった。いやあるいは全てが一つになってしまったのかもしれない。

雛苺は眠っていたようだった。

ふと眼を覚ますと、目の前にはおそらくローゼンと思われる人物がいた。

雛苺「お父様・・・なの？」

ローゼン「ついに私はアリスを完成させた・・・。正直貴方がやってくるとは予想外だったが。」

雛苺「ここはどこ？うにゅーはないの？」

ローゼン「ここは・・・どこだろうか。私にもよく分からない。多分nのフィールドのどこかなのだと思うが、気づいたらここにいた。

貴方が私をここに連れてきたのではないのか？」

雛苺「うにゅー？そんな覚えはないの。」

ローゼン「ならば無意識・・・ということもありうる。

私もアリス完成のためnのフィールド内を歩き回っていたが、その中で開かない扉がいくつかあった。

その中のどれかなのかもしれない。

・・・もしかしたらアリスが鍵になり私はさらなる領域への扉を開くことができた

ということなのであろうか？」

雛苺「お父様。みんなを元に戻してほしいの。」

ローゼン「貴方のメッセージ・・・いや貴方達のメッセージは私にもとどいた。

おそらく宇宙に住む全ての存在に届いたのであろう。それこそがアリスともいえるもの

だったのかもしれない・・・。

そつえば外はどうなっているのだ？割合どうでもいい話かもしれないが。」

雛苺「ねえお父様。ヒナのお話聞いてほしいのよ。」

ローゼン「ん？そうだった。最初も言ったがそもそも、貴方がアリスになるとは思わなかった。

いやそもそも貴方はアリスなのか？

あるいは貴方がアリスになることを拒絶しているのか？

なににせよアリスゲームはもう一度再開だな。」

雛苺「じゃあみんな元に戻してくれるの？」

ローゼン「可能だよ。少し面倒だが可能だ。本当は違うものにした
いが貴方がそう望む
なら無碍にもできない。

だが本当にいいのかね？また貴方達は戦わないといけないのだよ。

貴方は戦いをやめるために私のところにきたのだろうか?」

雛苺「ヒナもお父様の願いをかなえてあげたいの。でもヒナはみんなも好きだから。」

だからね……。何回アリスゲームをやったってヒナがまたここにやってきてみんなを元に戻してもらうの。」

ローゼン「やれやれ! 誰に似たのかな。ふふっ……。いうまでもない私も貴方も強情だよ。一度こうと決めたら後には引けまい。さすが私の娘といったところか。」

いいだろう。勝負だ。雛苺。私と貴方のアリスゲームだ。」

雛苺「ええ、勝負よ! でもきつとヒナが勝つわ!」

ローゼン「ほう? どうして?」

雛苺「だってヒナは娘だもの。父親は娘には勝てないってのりがいつたのよ!」

ローゼン「ふふっそうかもしれないな。だが私もそう滅多には負けないぞ。」

さて私はちよつとこの空間を調べたい。他に何かあるかな?」

雛苺「そう……。じゃあ……。いやなんでもないの。(抱っこしてほしくないなんていえないの。だってみんなに悪いし。)」

ローゼン「そうかね。そうだな……。確かに私もアリスがいて他の

娘たち・私の

ローゼンメイデンシリーズがいるならそれに越したことがないよ。
私は人形師。人形を愛さない人形師がどこにしようか。」

雛苺「お父様、ありがとうなの。ヒナもみんなもお父様のことが大好きなの。」

ローゼン「ふふつ。貴方にそう言われるとはな。ではもう眠りなさい。起きた時には
新しい戦いが貴方を待っているよ。」

何か世界が変わった。それが何なのかそれは定かではないが・・・
ともかくも雛苺の
戦いは続く。

その後。

真紅「これで2025回目の戦いね。水銀燈。」

水銀燈「そろそろ終わりにしてほしいわねえ。」

真紅「心配しなくてもこれで終わりよ。」

水銀燈「ふふつ・・・。」

蒼星石「翠星石。今日こそ君に勝つよ。」

翠星石「どこからでもかかってきやがれです!」

蒼星石「よくいった。その言葉すぐ後悔することになる。」

雪華綺晶「貴方さえ倒せば私の独壇場ですわ。黄薔薇のお姉さま。」

金糸雀「そううまくいくかしらー?」

雪華綺晶「ふざけてるのですか? 貴方は邪魔なのです。消えてください。」

ドールズ「さあ! アリスゲームの始まりよ!」

雛莓「そうはいかないの!」

ババーン! 今まさに激突しそうになるドールズの目の前に新たなドールが現れる。

水銀燈「邪魔な子が来たわねえ・・・。」

雪華綺晶「厄介なことです。」

金糸雀「ヒナはどうしてカナたちの邪魔をしようとするかしら?」

真紅「アリスになれるのは一人よ。雛莓。」

蒼星石「みんな、ここは一時共闘しないか? まずあの邪魔ものを排

除しようよ。」

翠星石「ええ……。仕方ねえですね。あくまで翠星石達の邪魔をしようというのなら。」

ドールズは標的を雛苺に絞り、人工精霊を放った。

水銀燈「メイメイ！」

真紅「ホーリエ！」

蒼星石「レンピカ！」

翠星石「スイドリーム！」

金糸雀「ピチカート！」

雪華綺晶「……。」

ベリーベル「うひょー！これは死にましたなあ！」

巴「大丈夫なの？雛苺。」

しかし雛苺は自信と気迫で満ちていた。

雛苺「行くのよ！ベリーベル！巴！アリスゲームの始まりなの！」

巴「行こう！雛苺！」

ベリーベル「それは無茶ですよ……。あんなのに勝てるわけありま

せん。

とはいえないかないよりはましか・・・」ヒューン！

ベリーベルは5体の人工精霊の群れに突っ込む。

雛苺「ヒナはみんなを守る。心を一つに！ストロベリーチェンジ！ピカピカピカーン！

雛苺の戦いは今日も続く。果てしなく続く。戦いに終わりがあるのかおそらくない。

雛苺はみんなを守るためにみんなと戦う。守るとは何を？誇りか？心か？

雛苺の戦いは憎しみを許す戦い。どこかで止めなければ憎しみの連鎖は果てしなく続く。

それを断ち切るのが雛苺の戦い。雛苺は闇を認めない。闇を伴う戦いを光で包む。

光を求め、光に満ち、光で照らし続ける。止まらない闇に対してたった一人だとしても足掻き続ける。

いや雛苺は一人ではない。雛苺の心は多くのものに支えられている。それらを信じて雛苺は戦う。

闇を光で照らす戦い。

あるいはその輝きこそが、アリスであつたのかもしれないし、のかもしれない。

これはある光を纏つた愚者のおはなしでした。

第二十一幕：光を纏った愚者のおはなし（後書き）

ローゼンメイデンとはなにか。アリスとは？アリスゲームとはなんなのか。

雛苺に力を持たせ物語を進めることでその答えを出すことが今回の目的でした。

一点の穢れもないただ純粋な思い、それは気高く美しい愚者の魂。

賢い人ならば優先順位を選別でき結果的にみんなが幸せになる方法
を導き出すことができる。

愚者は、それをしないため必ず失敗し、結果的にも全てを台無しに
してしまう。

ただ美しさという点でいえば、そういういわば合理性を超越した所
にいる存在にこそ美しいのではないだろうか。

理屈で分かる美しさは美しさとは言えないだろう。不合理なもの、
そして愚かしいまでの真っ直ぐな心こそあるいはアリスではないだ
ろうか。

不安定な解答となりましたが、今回はこれで良しとします。

ここまで読んでくださった方ありがとうございます。

投稿が遅れてごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3762h/>

光を纏った愚者のおはなし

2010年10月9日05時46分発行